

さかいだいせきにしだいせき

境田遺跡・西田遺跡

——本原地区県営農村活性化住環境整備事業に伴う緊急発掘調査報告書——



1996

上小地方事務所
真田町教育委員会

SAKAIDA SITE・NISHIDA SITE

さかいたいせき　にしだいせき

境田遺跡・西田遺跡

——本原地区県営農村活性化住環境整備事業に伴う緊急発掘調査報告書——

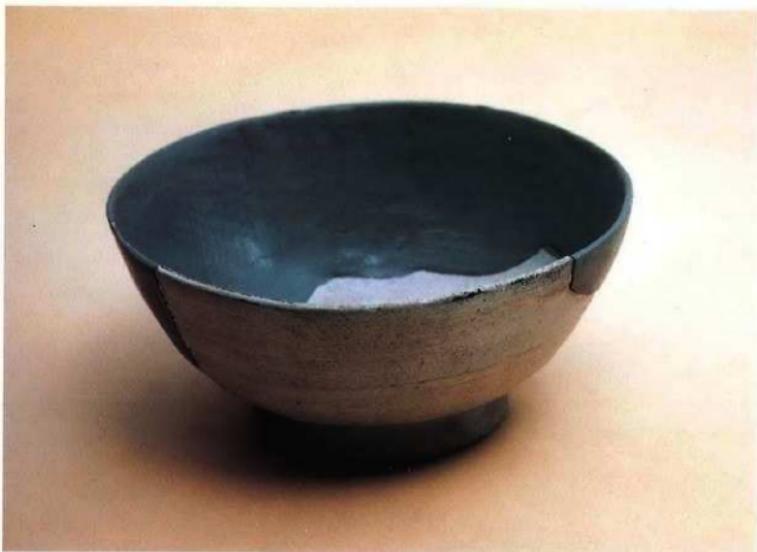
1996

上小地方事務所
真田町教育委員会

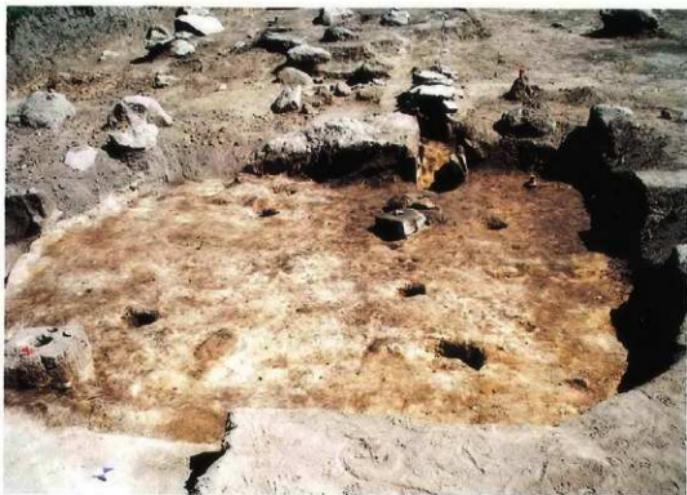


境田遺跡全景

境田遺跡は神川の左岸の段丘上に位置する縄文時代から平安時代の複合遺跡である。今回の調査で住居址や古墳時代の石製模造品などが出土した。



境田遺跡包含層出土灰釉陶器



5号住居址全景



カマドおよび煙道部拡大

境田遺跡では2軒の古墳時代の住居址から写真のような石組みの煙道(えんとつ)が検出された。

このようなしっかりした煙道は当町周辺ではまれであり、貴重な資料である。



西田遺跡全景

西田遺跡では中世のものと推定される集石遺構が検出された。集石内からは中世陶磁器、石臼などが出土した。遺構の性格は不明。

序

真田郷には昔から松代や群馬に通ずる交通路があり、古墳時代の集落もこの要衝の地に発展してきました。境田遺跡・西田遺跡はこの真田郷の南玄関口にあたります。境田遺跡では以前から土師器・須恵器の破片が出土に散見され、関係機関では埋蔵文化財の包蔵地として注目されてきたところであります。

真田町では近年各所で圃場整備が行なわれるようになっておりますが、境田・西田遺跡は、県営農村活性化住環境整備事業の本原地区下原圃場整備事業として整備されることとなったことから、限られた時間の中で真田町教育委員会が平成5年度と6年度の2か年にわたって発掘調査をしたものです。

この結果、境田遺跡では、旧石器時代のものと思われる石器や古墳時代の石製模造品と呼ばれる祭祀の道具、古墳時代後期の石組みの煙道、堅穴住居址数基など旧石器時代から平安時代の貴重な資料を得ることができました。

また、西田遺跡では当初期待された小沼長者古墳は確認できませんでしたが、中世のものと思われる集石造構が発見されました。

このように、境田遺跡・西田遺跡では当町の歴史を紐解いていく上で、実に貴重な資料を得ることができました。特に境田遺跡の石組みの煙道は上小地方では他に例が少なく、今後の更なる分析が期待されます。

最後になりましたが、この発掘調査にあたり多大なご指導を賜りました長野県教育委員会文化課、上小地方事務所土地改良第一課、そして快く作業に協力してくださいました朝上田地域シルバー人材センターの皆様方ほか協力いただいた大勢の皆様方に深甚なる敬意と感謝を申し上げ序にかえる次第であります。

平成8年3月

真田町教育委員会
教育長 三井俊男

例　　言

- 1 本書は、長野県小県郡真田町大字本原字境田及び西田における境田遺跡・西田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、本原地区県営農村活性化住環境整備事業（は場整備）の実施に先立ち、上小地方事務所の委託を受けて行った。
- 3 調査は、真田町（真田町教育委員会社会教育係）が国庫補助事業として行った。
- 4 調査は発掘調査から遺物整理・報告書刊行まで含めて1993年11月15日から1996年3月22日まで実施した。
- 5 発掘調査に係る作業分担は以下のとおりである。

◎ 遺構実測	和根崎剛・川上麻子・田畠しづ子・柳沢和代・横沢初枝
◎ 遺構写真	和根崎剛
◎ 遺物復元	相馬敬子・田畠しづ子・横沢初枝
◎ 遺物拓本	横沢初枝・相馬敬子・田畠しづ子・柳沢和代・荻原喜久江
◎ 遺物実測	和根崎剛・川上麻子・相馬敬子・拂新日本航業・仰写真測図研究所
◎ トレスス	川上麻子・田畠しづ子・荻原喜久江
◎ 遺物写真	和根崎剛・仰写真測図研究所
◎ 遺物観察表作成	和根崎剛・川上麻子・相馬敬子
- 6 本文の執筆は和根崎剛・川上麻子が分担して行った。文責は別途記載してある。
- 7 調査に係る基準点測量は拂新日本航業に委託した。
- 8 遺物の自然科学分析調査を拂パリノ・サーヴェイに委託して行った。
- 9 調査に係る資料は真田町教育委員会が保管している。
- 10 本書の編集・刊行は事務局（真田町教育委員会社会教育係）が行った。
- 11 本書が上梓されるまでには、多くの方々や諸機関のご理解・ご協力を賜った。以下ご芳名を記して深く感謝の意を表したい。（順不同、敬省略）

安藤　裕・大竹憲昭・尾見智志・川上　元・倉沢正幸・児玉卓文・桜井秀雄・助川朋広・廣瀬昭弘・
町田勝則・百瀬長秀・真田町農林課・伊上田地域シルバー人材センター・
上小地方事務所土地改良第一課・長野県教育委員会文化課

凡 例

1 遺構の略号は下記のとおりである。

SB 竪穴住居址 Pit ピット T 竪穴状遺構 SK 土坑址

2 遺構名は時代別ではなく任意に命名した。

3 実測図の縮尺は下記を基本としたが、縮尺の異なるものもあり、各図毎に示した。

竪穴住居址・土坑址等 1/80 電 1/40

完形土器 1/4 拓本資料 1/3 小形石器（石錐等） 1/1

打製石斧・磨製石斧 1/2 磨石・砾石等 1/3

4 掘図中におけるスクリーントーンは、下記のものを示す。

遺構 遺構構築土 烧土

遺物 含繊維土器断面 須恵器断面 黒色処理 灰釉陶器

5 土層の色調は「新版 標準土色帖」に基づいている。

6 中近世陶磁器の鑑定は安藤裕氏に依頼して行った。

7 石質の鑑定は田畑和秀氏に指導を受けて行った。

目 次

卷頭図版		
序	真田町教育長 三井俊男	第 5 章 自然化学分析 ル・パリノ・サーヴェイ 早稲田大学 金子浩昌
例言・凡例・目次		境田遺跡における自然化学分析 51
第 1 章 調査の経過 川上麻子		はじめに 51
第 1 節 調査に至る経過 1		1 調査課題 51
第 2 節 調査団の構成 1		2 試 料 51
第 3 節 調査の概要と経過 2		3 分析方法 52
1 各年度の経過 2		4 土器内容物の推定 52
2 調査日誌(抄) 2		5 燃料材の推定 52
第 2 章 遺跡周辺の環境 川上麻子		6 動物遺存体の種類 53
第 1 節 地理的環境 4		
第 2 節 歴史的環境 4		
第 3 章 境田遺跡の調査結果 和根崎剛		第 6 章 西田遺跡の調査結果 和根崎剛
第 1 節 発掘調査の概要 8		第 1 節 発掘調査の概要 55
1 遺跡および調査対象地点の概観 8		1 遺跡および調査対象地点の概観 55
2 調査の方法 8		2 調査の方法 55
3 遺構・遺物の概観 8		3 遺構・遺物の概観 55
4 基本層序 9		4 基本層序 56
5 検出された遺構・遺物 10		5 検出された遺構・遺物 56
第 2 節 調査の結果 12		第 2 節 調査の結果 56
1 古石器時代の遺物 12		1 遺構と遺物 56
2 繩文時代の遺構と遺物 12		
3 古墳時代の遺構と遺物 19		第 7 章 調査の成果と課題 和根崎剛
4 平安時代の遺構と遺物 29		第 1 節 境田遺跡 60
5 時期不明の遺構 37		1 JH石器時代 60
6 中世の遺物 37		2 繩文時代 60
第 4 章 遺物観察結果一覧 川上麻子		3 古墳時代 60
1 境田遺跡 41		4 平安時代 62
		5 中世以降 62
		第 2 節 西田遺跡 62
		おわりに 63
		写真図版

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経過

平成4年度において、真田町農林課農村整備係担当職員から「本原地区農村活性化住環境整備事業」の計画があるとの連絡を受けた。真田町教育委員会において事業地域内の埋蔵文化財の有無について調査したところ、周知の境田遺跡・小沼長者古墳が存在することが判明し、上小地方事務所土地改良第一課、及び長野県教育委員会文化課との協議の結果、平成5年度に境田遺跡の範囲確認調査、小沼長者古墳の確認調査を実施し、平成6年度に両遺跡について本調査のうえ記録保存する方針で合意した。

平成5年度には調査担当者を採用し、平成5年4月27日付けで上小地方事務所と発掘調査委託契約を締結し、11月に範囲確認調査を実施した。

平成6年度は平成6年6月10日付けで上小地方事務所と発掘調査委託契約を締結し、調査を実施した。

第2節 調査団の構成

（事務局） 真田町教育委員会

教 育 長	松尾一久	（平成5年10月31日退任）
	三井俊男	（平成5年11月1日着任）
教 育 次 長	三井俊男	（平成5年10月31日退任）
	芳沢孝太	（平成5年11月1日着任）
社会教育係長	高寺昭三郎	（平成5年6月7日退任）
	神林信義	（平成6年3月31日退任）
	荒井今朝信	（平成6年4月1日着任）
社会教育係	小宮山治仁、和根崎剛、川上麻子	
担 当 者	和根崎剛	（真田町教育委員会主事、長野県考古学会会員）
調 査 員	川上麻子	（真田町教育委員会主事）
調 査 補 助 員	荻原喜久江、相馬敬子、田畠しづ子、柳沢和代、横沢初枝 （以上、真田町臨時職員）	
発掘調査参加者	樋口啓一、山崎和子、小林幸雄、三井正明、田中栄吉 淡沢里治、小林みよ子、大久保きよ、半田孝雄、岡嶋庄平 桜井好平、木島久男、一之瀬貞美、関口憲弘、海瀬正之 海瀬徳子、堀内 登、宮下松茂、山岸知子（順不同） （以上、飼上田地域シルバー人材センター）	
町内小学生		

第3節 調査の概要と経過

1 各年度の経過

(1) 平成5年度の経過

本年度の発掘調査及び整理作業に係る総事業費は1,000千円（農政部局負担80.6%・文化財保護部局負担19.4%）であった。境田遺跡は範囲確認調査のため、1m幅のトレンチを3本設定し、約100m²の発掘調査を実施したところ、古墳時代の石組み造構及び平安時代の住居址等が検出された。調査の結果、造構は畠地では残っているものの、水田部分では残っていないことが判明し、翌年の調査範囲が決定された。小沼長者古墳はその位置や現況について全く不明であったため、昭和52年作成のマイラーベースにプロットされていた点の付近を事前に現地踏査し、その際に古墳の一部ではないかと推定された巨石付近について計20m²程のトレンチを設定し、造構の有無を調べた。その結果、巨石付近に円礫や板状の石の集積および土器片が確認された。両遺跡の調査は11月15日から11月26日まで行なわれた。この範囲確認調査については概報を発行した。

(2) 平成6年度の経過

本年度の発掘調査及び整理作業に係る総事業費は10,126千円（農政部局負担80.6%・文化財保護部局負担19.4%）であった。境田遺跡では古墳時代後期・平安時代の住居址等が検出された。また、後章で詳述するが、小沼長者古墳については発掘調査の結果、古墳の可能性は捨てきれないものの、別の造構であると判断され、新たな遺跡として西田遺跡と命名された。現場における発掘作業は6月14日から8月19日まで行なわれ、12月1日から整理作業を実施した。

(3) 平成7年度の経過

本年度の報告書作成作業に係る総事業費は2,162千円（農政部局負担80.6%・文化財保護部局負担19.4%）であった。作業は7月3日から行なわれ、平成8年3月22日に報告書を刊行して調査を終了した。

2 調査日誌（抄）

1993年（平成5年）

- 11月15日 小沼長者古墳（西田遺跡）の調査開始。重機でトレンチ掘削。石組みを確認する。
- 11月17日 平板測量・写真撮影。
- 11月18日 トレンチ埋め戻し。
- 11月22日 境田遺跡の調査開始。作業員5人体制。
住居址等の造構が確認される。Cトレンチから石組みを検出。
- 11月25日 実測等終了。トレンチ埋め戻し。
- 11月26日 ラジコンヘリによる造構全体写真撮影。
- 11月29日 整理作業を開始・西田遺跡を新たに認定。

1994年（平成6年）

- 3月24日 平成5年度の作業を終了する。

平成6年度

1994年（平成6年）

- 6月14日 境田、西田共に重機による表土剥ぎ
作業開始（～15日）。プレハブ・機材
搬入。
- 6月16日 西田遺跡のみ調査（～17日）。
- 6月20日 発掘調査開始の式。境田遺跡の調査
を開始。作業員14名体制。
- 6月23日 西田遺跡の調査を中断し、境田遺跡
の調査に専念する。
- 6月24日 境田遺跡で住居址の掘り下げを開始。
- 6月30日 境田遺跡のグリッド杭打ち。
- 7月4日 境田遺跡で前年確認された石組みが
姿を現す。付近から石製模造品が出
土。祭祀関連の遺構と認証。
- 7月5日 石組み付近のグリッドを細分し調査
～
を慎重に行なう。覆土のフリイかけ
を念のため実施。
- 7月21日 石組み南側に設定したトレンチの断
面に堅緻面を検出。石組みが住居址
のカマドの煙道である可能性に気付
く。調査方針の変更。4号住居址か
ら古墳時代の甌や鉄製手斧が出土。
- 7月22日 石組みが古墳時代の住居址の煙道であることを確認。2軒の重複が認められた。
- 8月10日 境田遺跡でバルーンによる空中写真測量を実施。
- 8月13日 西田遺跡の集石遺構の実測を行なう。
- 8月15日 境田遺跡で現地説明会を開催。参加者50名。
- 8月18日 プレハブ・機材撤収。
- 8月19日 現場での作業を終了する。
- 12月1日 町文化会館郷土資料室にて遺物の整理作業を開始。



西田遺跡表土除去風景



境田遺跡空中写真測量

1995年（平成7年）

- 3月23日 平成6年度の作業を終了する。

平成7年度

1995年（平成7年）

- 7月3日 町文化会館郷土資料室にて遺物の整理作業及び報告書掲載用図面等の作成にかかる。

1996年（平成8年）

- 3月22日 発掘調査報告書を刊行し、平成7年度の作業を終了する。

第2章 遺跡周辺の環境

第1節 地理的環境

真田町は長野県の東部に位置し、総面積181.90km²を有する。町の北東部には四阿山(2,332.9m)、根子岳(2,128m)等の高峰が連なり、山麓には菅平高原が広がっている。

四阿山を源とする神川は高原のほぼ中央部を南西に流れ出て、途中傍陽川と合流し、上田市で千曲川に流入する。神川の沿岸に広がる本原扇状地面には谷平野が発達しており、一括して神川渓谷平野とも呼ばれ、上田盆地から放射状に伸びる谷平野のひとつとして数えられている。

境田遺跡・西田遺跡の位置する木原地区は上田市と境界を接し、現在でも水田がほとんどを占める農村地帯である。神川の河岸段丘上のひらけた場所であり、日当たりもよく、集落を形成するには最適の立地である。

近年、上田市のベッドタウンとしての役割が増し、団地造成等による開発が盛んな地域である。このようななか、埋蔵文化財を取り巻く状況は決して良好であるとは言えない。

第2節 歴史的環境

真田町は真田氏発祥の地として知られる。また、群馬、松代への交通路としての役割は大きく、原始・古代においても交通の要衝として重要な場所であったと思われる。当町の歴史を考える場合にはこの点を踏まえておく必要があろう。

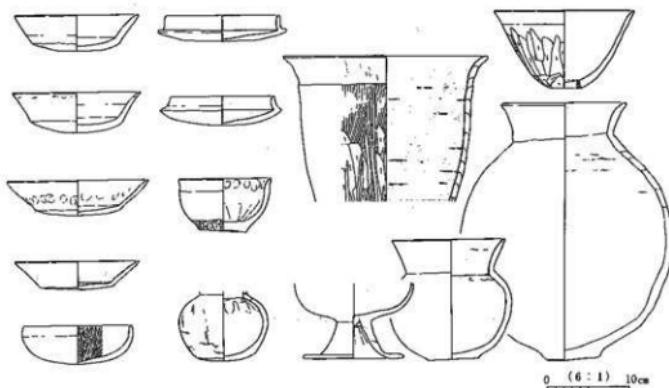
原始・古代を概観してみよう。菅平高原の遺跡については小原等氏によって早くから注目され、資料が蓄積された。小原氏の地道な研究活動に対して深く敬意を表したい。旧石器時代の遺物は菅平小中学校敷地遺跡、唐沢B遺跡等からの出土が知られている。学校敷地遺跡出土の石器は東山系文化に属するものと考えられている。また、唐沢B遺跡は神子柴型石斧を出土した遺跡として有名である。なお、境田・西田遺跡の位置する平野部では、旧石器時代の遺跡は発見されていない。

つづく绳文時代になると菅平高原の東組E遺跡、石戸山A遺跡などに草創期・早期の生活の痕跡が認められる。菅平地区では過去に何度も発掘調査が行なわれたが、押型文系土器の出土が見られ、それに伴う石器も多数見つかっているものの、住居址の検出には至っていない。前期になると平野部でも遺跡の数が増え、四日市遺跡で花積下層式～黒浜式併行期の資料が見つかっている。住居址も検出されており、注目される。四日市遺跡は中期終末期の加曾利E式土器・片草文系土器の共伴する時期が最盛期で、敷石住居址がみられ、典型的な柄鏡型住居址も検出されている。該期の浅間山山麓には四日市遺跡をはじめ、小諸市の鷹土遺跡、東部町の久保在家遺跡といった同時期の大きな集落が分布しており、ひとつの文化圏として捉えられる可能性を秘めている。四日市遺跡の土器様相には八ヶ岳山麓に展開する曾利式土器の影響もうかがえ、興味深い。後期の遺跡は雁石遺跡が知られ、新名寺系の大深鉢や亀型土製品、七ツ耳鉢、石棒などの出土を見た。中でも亀型土製品は墓域からの出土という点で貴重な例である。土笛としての機能が推定され、中空で腹部に穴が2つ開いている。晩期の遺跡については菅平の唐沢、陣の岩といった岩陰遺跡から土器、石器とともに骨角器の出土が知られている。

弥生時代の遺跡はキャンプサイトとして前述の岩陰遺跡と若干が知られるのみで、竪穴住居址については検出例がない。また、遺物も岩陰遺跡を除くと後期の箱清水式土器の破片が散在的に見られる程度であり、水稲耕作を基盤とした集落の存在は疑問である。

古墳時代集落が展開するのは後期の鬼高式期になってからである。後期円墳の典型である藤沢古墳や本原地区の多数の小円墳と時期的に一致する。近年、当町では住居址の検出例が増えている。境田遺跡では石製模造品が出土した。当時の集落規模及び経営基盤については未だ不明であるが、耕地拡大の動向と併せて検討課題である。

奈良・平安時代の様相については四日市や境田遺跡で平安時代の集落址がみつかっている以外は、断片的な情報しかない。しかし、おそらく平安時代になると大規模かつ長期的な集落が平野部に存在していたと思われる。



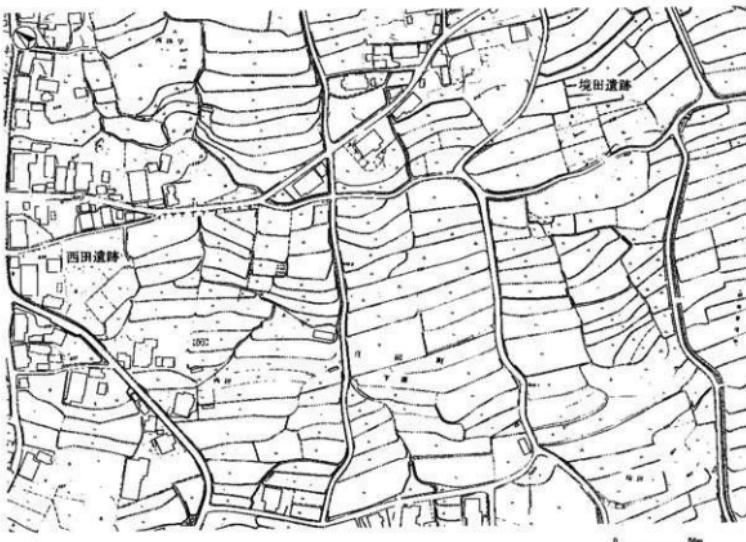
北畠B遺跡出土土器



第1図 境田遺跡・西田遺跡の位置と周辺の遺跡

No	名 称	時 代	所 在 地	備 考	No	名 称	時 代	所 在 地	備 考
1	四日市遺跡	縄文～	横尾 四日市	平成元年調査	20	鶴の子古墳跡	古墳	本原 下源町の子田	
2	柳又遺跡	縄文	戸沢 柳又		町下 1号墳跡	〃	〃	上原町下	
3	松塗田遺跡	〃	〃 松塗田		町下 2号墳跡	〃	〃		
4	石舟遺跡	〃	石舟 石舟		町下 3号墳跡	〃	〃		
5	雁石遺跡	〃	雁石	昭和49・50年調査	町下 4号墳跡	〃	〃		
6	山道家遺跡	〃	横尾 山道家		町下 5号墳跡	〃	〃		
7	荒井古墳跡	古墳	本原 荒井		21	矢倉城古墳跡	〃	〃 下原東出早	
8	の若古墳跡	〃	〃 西歟		22	久九館 1号墳跡	〃	〃 久九館	
9	下原 1号墳跡	〃	〃 下原		23	久九館 2号墳跡	〃	〃	
10	下原 2号墳跡	〃	〃		24	西出早 1号墳跡	〃	〃 西出早	
11	北白庭遺跡	〃	〃 北白庭		25	西出早 2号墳跡	〃	〃	
12	南荒井遺跡	〃	〃 南荒井		26	村中古墳跡	〃	〃 村中	
13	山崎遺跡	縄文	〃 山崎		27	桜林 1号墳跡	〃	〃 上原東出早	
14	竹室遺跡	〃	〃 竹室		28	桜林 2号墳跡	〃	〃	
15	表木遺跡	〃	〃 表木		29	南町上遺跡	縄文	〃 中原南町上	
16	櫻藏院古墳跡	古墳	〃 櫻藏院		30	幕沢遺跡	古墳～	〃 大畠藤沢	昭和49年調査
17	広寺山 1号墳跡	〃	〃 中原南町上		31	幕沢古墳	古墳	〃	〃
18	広寺山 2号墳跡	〃	〃		32	羽毛田古墳跡	〃	〃 下原羽毛川	墳 滅
19	北番匠A遺跡	古墳～	〃 北番匠		33	小沼長者古墳跡	〃	〃 西田	平成 5年確認調査
						西田遺跡	古墳～	〃 西田	平成 6年調査
						西田	中世～	〃 西田	〃

表1 境田遺跡・西田遺跡周辺の遺跡地名表



第2図 境田遺跡と西田遺跡の位置 (1/3000)

第3章 境田遺跡の調査結果

第1節 発掘調査の概要

1 遺跡および調査対象地点の概観

本遺跡は神川左岸の上田市と境界を接する田園地帯に位置する。今回発掘調査の対象となった地域は出早^{いりはや}雄神社の南西部の畠地であるが、遺跡の範囲及び時代等の性格も不明のまま遺跡分布図に登録されていた。表探査では縄文土器及び石器、土師器・須恵器が拾われており、幾多の時代にわたる遺跡であることが予想された。

調査対象地点は西に向かって傾斜しており、面積は約2,500m²を計る。畠地として利用されており、一部切土・盛土が認められる。また、土砂流失も認められ、耕作土直下にローム層がみられる場所もある。

遺跡の位置する木原地区は团地造成等によって宅地化が進んでいる。上田市のベッドタウンとして最近、開発が急速に進んでおり、埋蔵文化財を取り巻く環境は決して良好とは言えない。

2 調査の方法

境田遺跡は昭和52年作成の遺跡分布図に登録されており、以前から耕作の際に土器片などの出土がみられ、周知の遺跡であった。しかし、調査に入る前の情報はほとんど手に入らず、まず、遺跡の範囲と内容を把握することが先決であった。そこで、本調査の前年、耕作終了後に遺跡の範囲確認のためのトレンチ調査を行い、調査方法を検討することとした。

トレンチ調査の結果、遺跡が縄文から平安時代にわたる複合遺跡であることが判明し、部分的に自然流失等がみられるものの、遺構確認面が2面存在することが予想された。そのため、遺跡のなかで正確に遺構・遺物の位置を記録でき、また、将来調査が周辺の遺跡に及んだ場合の整合性を考え、国家座標に基づき8×8mのグリッドを組んだ。東西列を西からA・B・C……K、南北列を北から1・2・3……11とし、各グリッドの北西交点を基にA-1、B-2のようにグリッドナンバーを付した。各遺構の検出位置及び一部の遺構外遺物の取り上げは、このグリッド単位で行なっている。

遺構の実測方法は、遺構全体図はバルーンによる空中写真測量を行い、各遺構の実測は簡易造り方で行なった。

調査は耕作土（1層）を重機で取り除いたあと、II層以下は人力による調査を行なった。

3 遺構・遺物の概観

遺跡は古墳時代後期、平安時代の集落址で、縄文時代の生活の痕跡もみられる。今回の調査では住居址6軒（古墳3・平安3）と縄文時代の土坑1基、平安時代の小鐵冶遺構と推定される遺構などを検出した。特筆すべきは石組みの煙道の付いたカマドをもつ古墳時代後期の住居址が2軒確認されたことである。

今回の調査で、ローム層直上から旧石器時代の槍先型尖頭器とみられる石器が1点出土した。町内で菅平高原以外の遺跡から旧石器が確認されたのは初めてである。遺構は検出されていない。縄文時代の遺構は土坑が1基検出された。遺物は遺構外から前期から晩期までの土器片の他、石器や磨製石斧などが出土している。遺物包含層が一部で失われていたが、幅広い時期の遺物が検出された。遺跡周辺では以前に縄文土器や

石棒などが見つかったという。

弥生時代の遺構・遺物は皆無である。

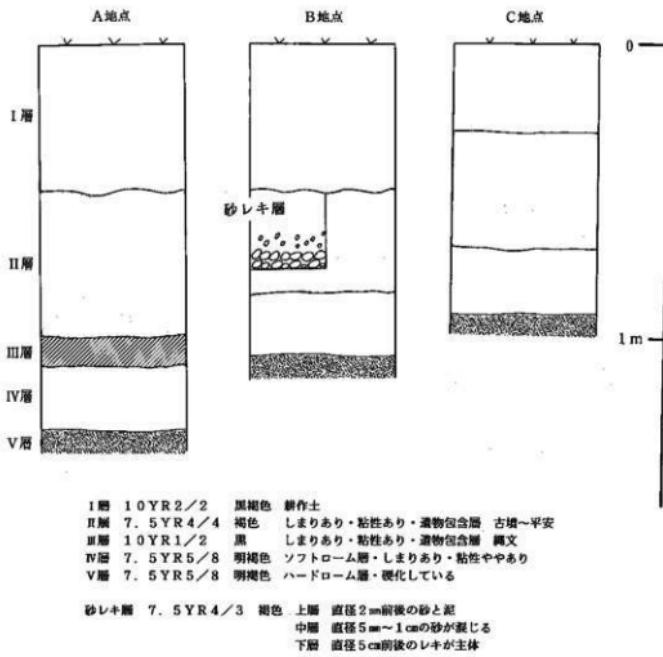
古墳時代後期の住居址は3軒確認された。うち1軒から鉄器を含んだ良好な一括資料を得ている。また、白玉と呼ばれる石製模造品が数点出土し、そのうち1点はカマド内からの出土である。また、土坑1基からは石製模造品が2点とウマの歯がまとまって出土した。

平安時代の遺構は住居址が2軒と小鐵冶遺構が確認されたが、遺物の量は乏しい。

また、発掘区内から計4枚の中世渡来銭が出土した。付近では以前からこの種の銭の出土が聞かれる。隣接する出早雄神社との関連も考えられる。

4 基本層序

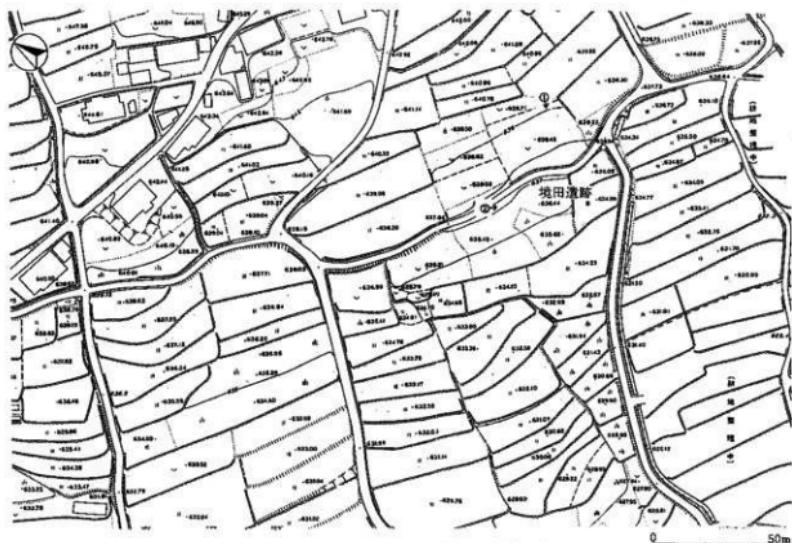
もっとも多いところで5層に細分できた。I層は表土ないし耕作土、II層（褐色土）とIII層（黒色土）が堆積腐食土層、IV層とV層がローム層である。古墳時代及び平安時代の遺構はII層上面から、縄文時代の遺構はIII層上面から掘り込まれているようであるが、古墳・平安時代の遺構の覆土とII層の色が酷似しており、実際にこれらの遺構の検出を行なったのはIII層上面となった。IV層はソフトローム、V層はハードロームで地元の人から「コビ」と呼ばれている。削平・流出によりI層直下にIV層が存在する部分がある。



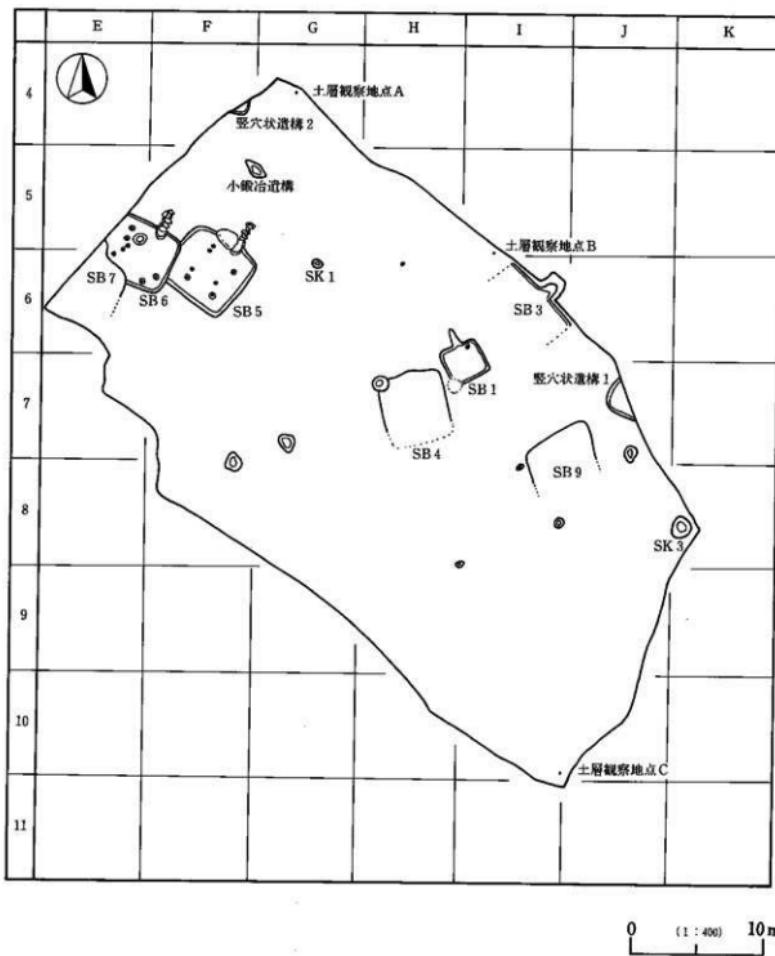
5 検出された遺構・遺物

境田遺跡から検出された遺構・遺物は下記のとおりである。

遺構	縄文時代	住居址 5軒（古墳3・平安2）
	古墳時代後期	土坑墓 9基（縄文1・古墳1・不明7）
	平安時代	竪穴状遺構 2基（古墳1・不明1）
		小鍛冶遺構 1基
遺物	縄文土器	前期～晩期土器
	土器	甕・壺・高壺・皿・瓶・羽釜・甌
	須恵器	甕・壺
	灰陶器	壺
	石器	石鎌・石匙・石鋸・打製石斧・磨製石斧・すり石・石棒 槍先型尖頭器（？）
	土製品	不明土製品・トイゴ片
	石製品	砥石・石製模造品（白玉・劍形）
	鉄製品	手斧・鐵鎌・（鉄滓）
	古銭	中世渡来銭（皇宋通宝・治平元宝・紹聖元宝）
	自然遺物	ウマの歯



第4図 遺跡周辺の地形と発掘区 (1/2000)



第5図 境田通路遺構全体図

第2節 調査の結果

境田遺跡は縄文時代から平安時代にわたる複合遺跡である。発掘現場における混乱を避けるため、各遺構の番号は時代に係わりなく、発見順に1から付与した。なお、調査の途中で造構ではないことが判明したものもあるため、番号に欠番がある。住居址に関する記述の順序は、①位置 ②調査の経過 ③覆土 ④壁面 ⑤床面 ⑥柱穴とピット ⑦竈 ⑧規模と形態 ⑨出土遺物と所属時期となっており、その他の遺構についてもこれに準じている。

1 旧石器時代の遺物（第6図）

黒曜石製の大ぶりな石器が1点出土した。IV層（ローム層）の上面付近からの出土である。造構や他の旧石器はみつかっていない。縦長剥片を用いて作られており、主剥離面および右側縁に自然面を残す。主剥離面の押圧剥離は側縁のみに行なわれている。表面の調整が旧石器の製作技法である点、ローム層の上面付近からの出土である点から今回はこの石器を旧石器時代の槍先型尖頭器として認識した。輪広で木葉形の形態を呈する。

当町においてはこれまで菅平高原での旧石器の出土はあったが、これが旧石器だとすれば平野部での出土は今回が初めてである。

2 縄文時代の遺構と遺物（第7～13図）

縄文時代の遺構は土坑を1基検出したのみである。住居址の検出には至らなかった。縄文時代の遺物包含層はIII層としたものであるが、調査区の北東部以外は何らかの原因によってII層が尖われている。そのため縄文時代の遺物の出土は北東部からのものが大部分を占める。土器は破片がほとんどである。

前期から晩期の遺物が出土しており、長期にわたってひととの生活がこの付近で営まれていたことが窺える。

土 坑

(I) I号土坑（SK I）（第7図）

調査の経過：前年のトレンチ調査の際に検出された。

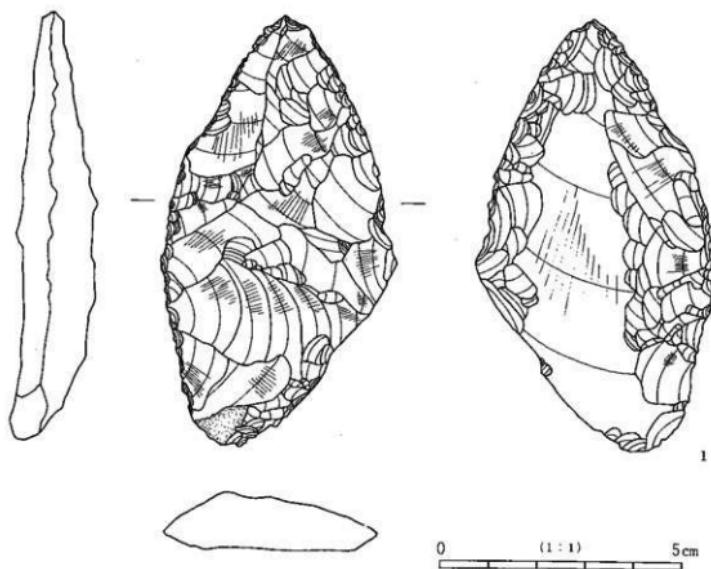
覆土：黒色土が堆積していた。

規模と形態：直径30cm、深さ15cm程度の土坑である。

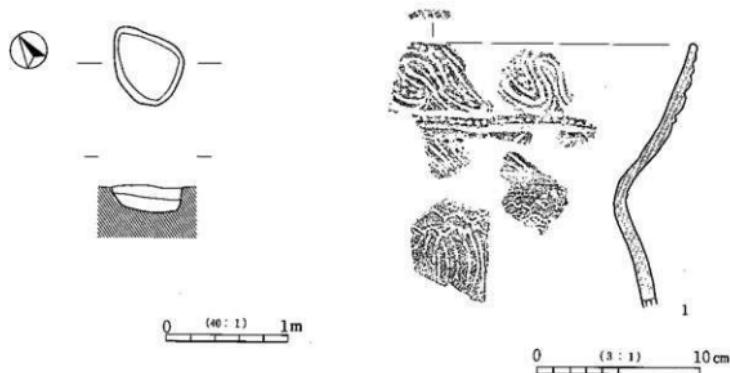
出土遺物と所属時期：土器片と黒曜石片を検出した。うち土器1個体は図上復元することが可能である（第7図-1）。胎土には僅かな纖維と黒曜石の微細な碎片が混入される。器形・文様構成とともに周辺域では類例を知らない。胎土の特徴からすれば前期に位置づけられそうであるが、大方の御教示を請う次第である。

包含層出土遺物（第8～13図）

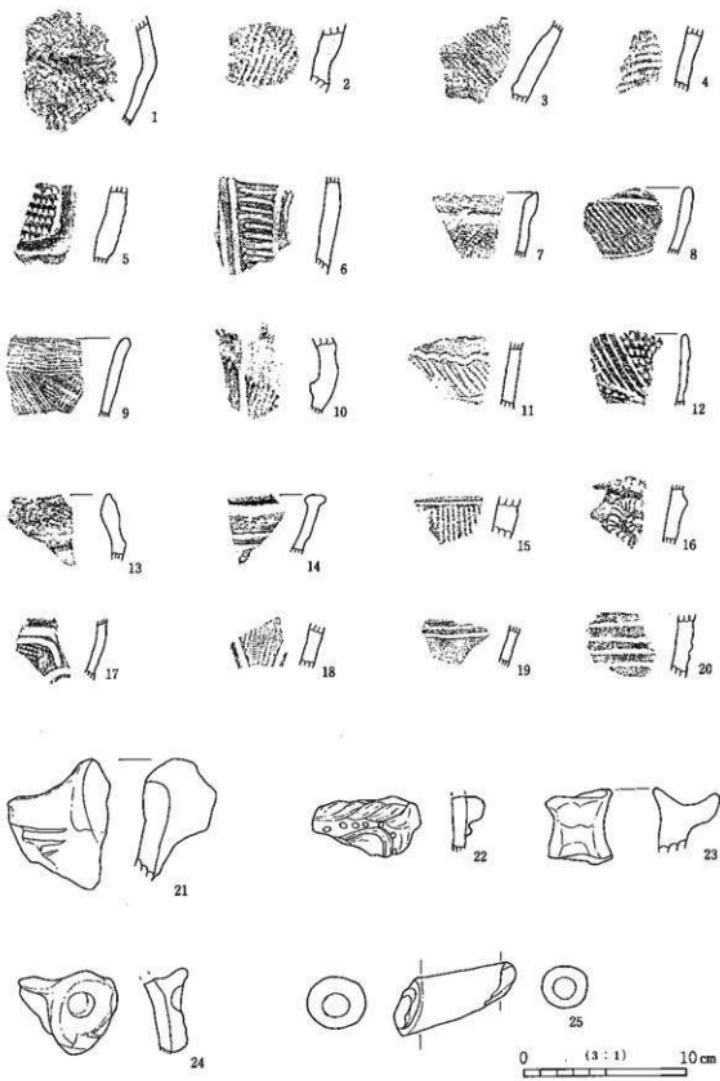
包含層からは前期から晩期にわたって遺物が検出された。第8図-1～4は纖維を含む前期の土器片。5～25は中期または後期の所産であろう。25のように注口土器の破片もみられる。第9図-1～6は晩期の土器である。6の水式土器の深鉢の大破片が出土したことが特筆される。以前に四日市遺跡でも該期の資料が



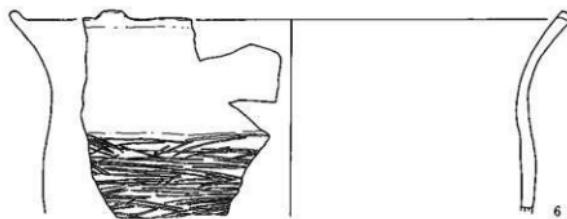
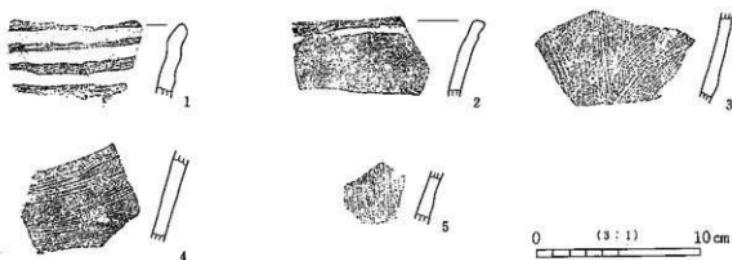
第6図 槍先型尖頭器実測図



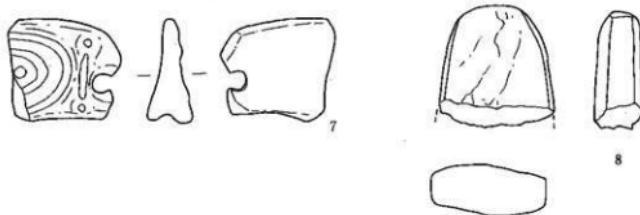
第7図 土坑1実測図および出土遺物実測図



第8図 縄文時代の包含層出土遺物実測図(1)

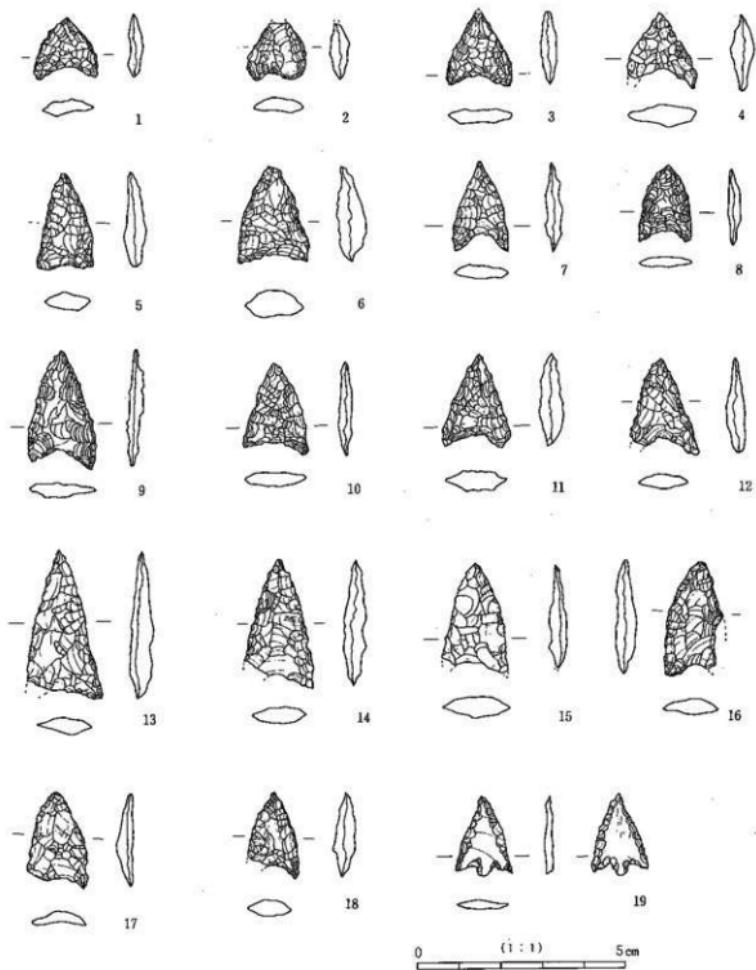


0 (4 : 1) 10 cm

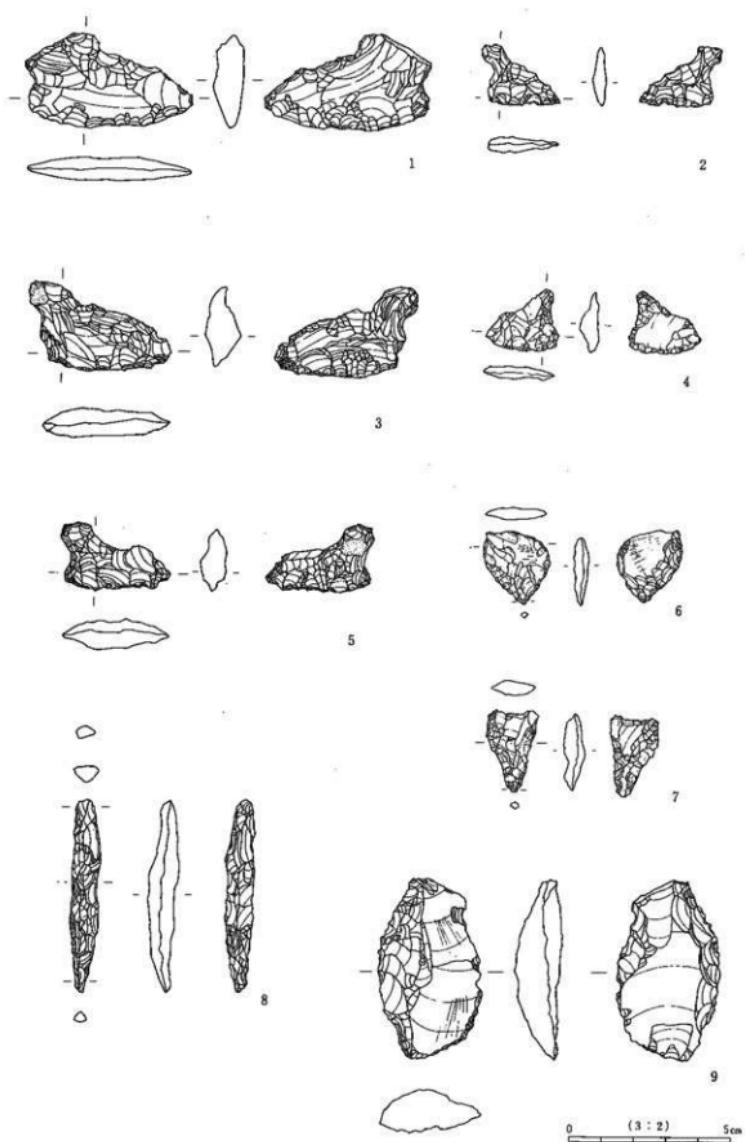


0 (2 : 1) 5 cm

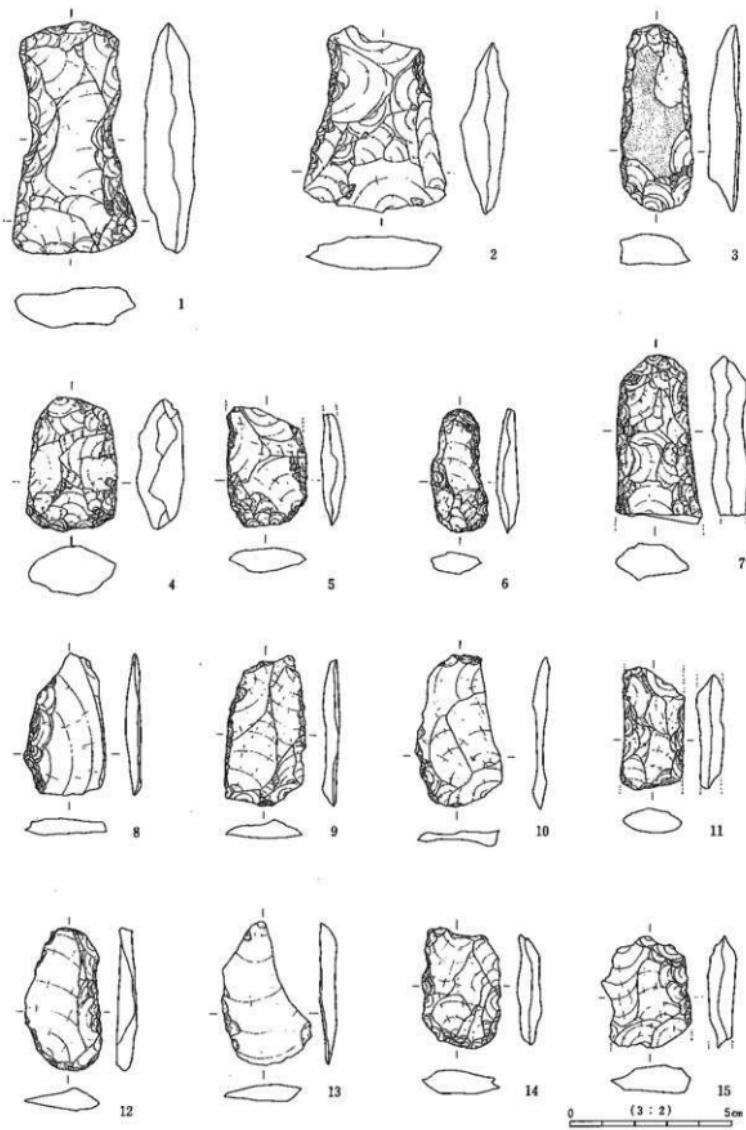
第9図 繩文時代の包含層出土遺物実測図(2)



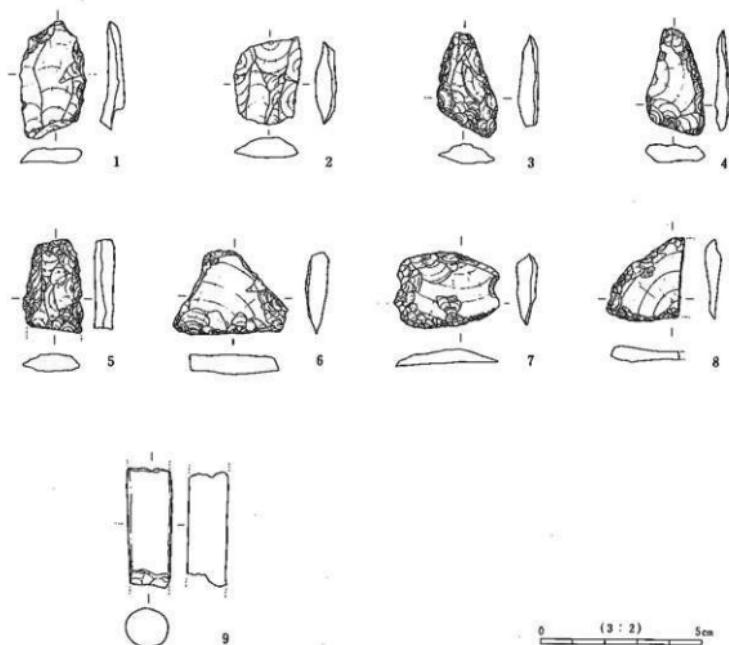
第10図 縄文時代の包含層出土遺物実測図(3)



第11図 縄文時代の包含層出土遺物実測図(4)



第12図 桶文時代の包含層出土遺物実測図(5)



第13図 縄文時代の包含層出土遺物実測図(6)

出土している。また、近年、南西に1kmほど離れた上田市の大日ノ木遺跡で晩期のまとまった資料が出土している(長野県埋文センター1994)。7の素材は粘土または柔らかい石材であると思われるが、用途については不明。

土器片の出土量に比して石器の出土量が多かった。第10図は石鎌を集成した。土器に時代幅がみられたようすに石鎌の形態にも時間差が認められよう。19のような有柄のものは1点のみ出土した。他に石匙や石錐、打製石斧などがみられる(第11~13図)。第13図-9は石棒の破片。晩期の所産であろう。

3 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は住居址が3軒と竪穴状遺構1基、土坑1基が検出され、良好な一括資料が得られた。特に石製模造品の出土は当町では過去に例がなく、注目される。また、住居址2軒から特徴のある煙道が検出された。

住居址

(1) 4号住居址 (SB4) (第14図)

位置：H-7～8 Gridにある。

調査の経過：II層掘り下げの際に多量の遺物が出土し、住居址と認識した。壁面は一部で確認できたものの検出時に既に床面のレベルまで達してしまっていたため、ほとんど不明である。床面直上で数個体の完形土器や鉄製手斧が出土した。

覆土：黒褐色土の堆積がみられる。

壁面：北壁の一部分しか確認できなかった。

床面：IV層まで掘り込んでいる。貼床が認められ、堅織面となっている。

柱穴とピット：精査したが確認できなかった。

電：北西壁の中央に付設されている。構築材である粘土が検出された。焼土の10cm程度の堆積がみられた。

規模と形態：一辺5m程度の方形を呈すると推定される。

出土：遺物と所属時期：古墳時代後期鬼高式期に位置づけられる。床面から多くの完形資料が出土した(第15・16図)。住居址一括資料として捉えられるものである。高环、甕、小型壺などが出土し、やや他の住居址とは異質な感じを受ける。また、同じく床面から鉄製の手斧が出土した(第15図-8)。柄を付けるための袋部を持ち、幅広の刃部を有する。X線撮影の結果、刃部に縱方向の切れ込みが認められた(写真図版8)。また住居址床面から10点余の丸石を検出した(第17図)。

(2) 5・6号住居址 (SB5・6)

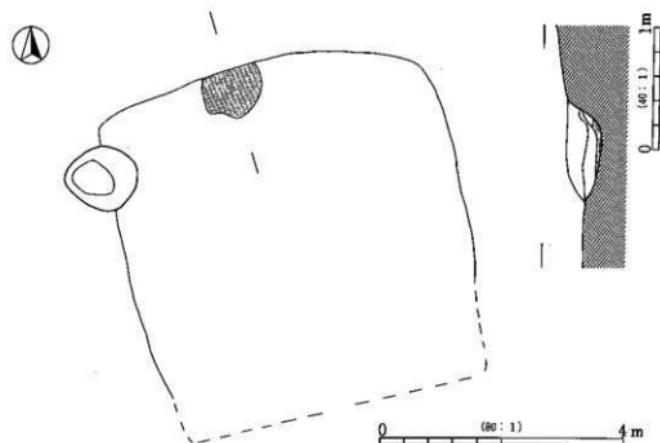
位置：E5～6、F5～6 Gridにある。重複関係はSB6が新。SB6はSB7(時期不明)とも重複し、一部調査区外にある。

調査の経過：両住居址とも石組みの煙道を持つ。II層掘り下げ中に煙道を検出していたものの、この時点で両住居址の平面プランはつかめていなかったため、配石造構であるという認識で周辺の調査を行なっていった。SB6の煙道はSB5よりも大形の石を使っている。こちらについては前年のトレンチ調査の際に既に検出され、廻部以下を意図的に欠失した土師器の甕2個体やベンガラの付着した皿などが出土していた。また、周辺の調査を進めたところ、SB6の煙道の傍らに焼土が確認され、中から石製模造品(白玉)が出土した。このようなことからこの造構を祭祀行為の行なわれたものと誤認し、以後の調査を停滞させる結果となった。煙道の周辺を更に細かくグリッド割りし、土を薄く掘り下げていき、念のため土をフリイにかけた。こうした作業のなか、前年に掘ったトレンチを掘り返し、土層観察用とした。こうしたなか、先輩諸氏の米訪が相次ぎ、トレンチ断面に堅織面らしいものがあるとの教示を受けた。住居址に伴う造構である可能性が高まり、思い切ってIV層上面まで掘り下げるのこととした。その結果、住居址の平面プランが判明し、停滞していた調査は一気に加速することとなった。

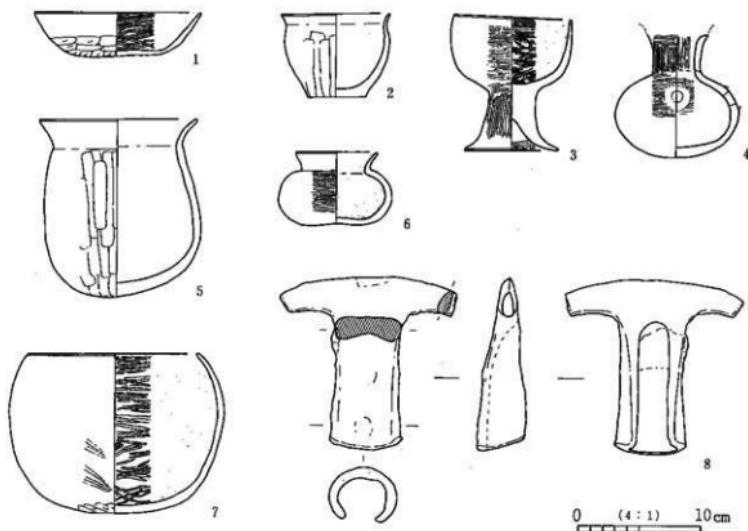
SB5(第18・19図)

覆土：黒褐色土(I)と暗褐色土(2)の堆積がみられる。

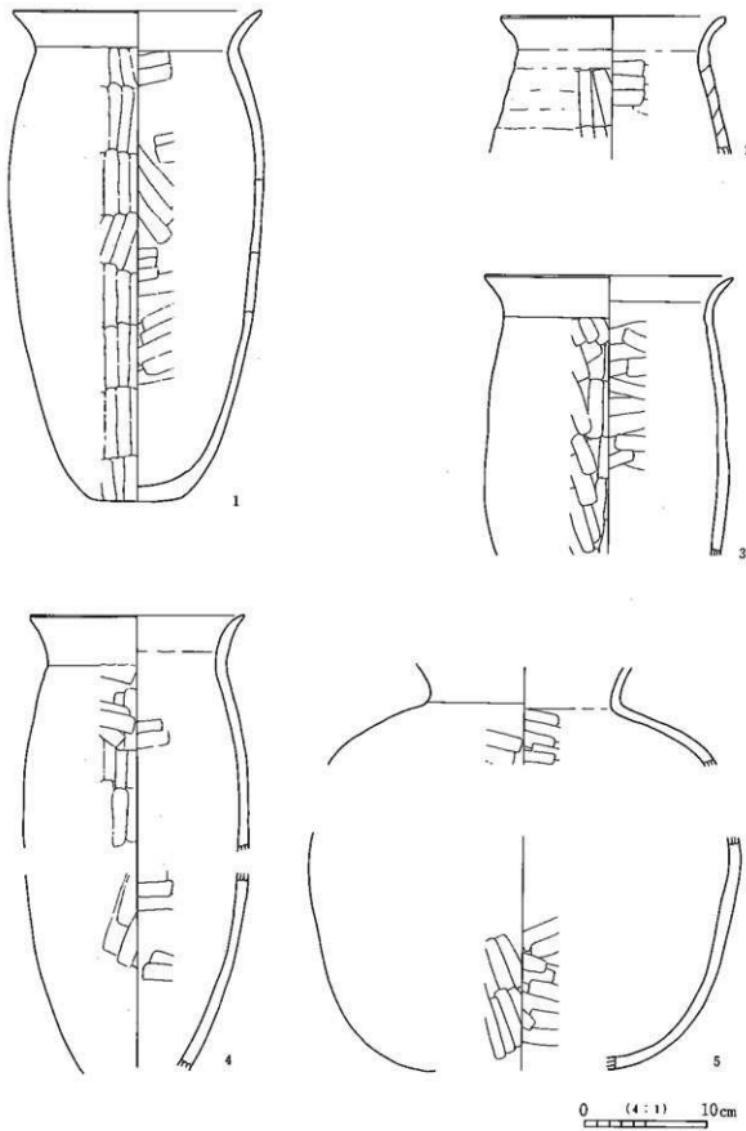
壁面：IV層(ローム層)内に深く掘り込んであり、容易に確認できた。壁高は40cmを計る。窓の付設された北の壁面は一部を巨大な岩を加工して壁面及び窓の構築材として利用しており、ローム層中に礫や岩の混じるこの地域での工夫がうかがえる。しかし、なぜ今までしてこの位置に住居を作らなければならなかっ



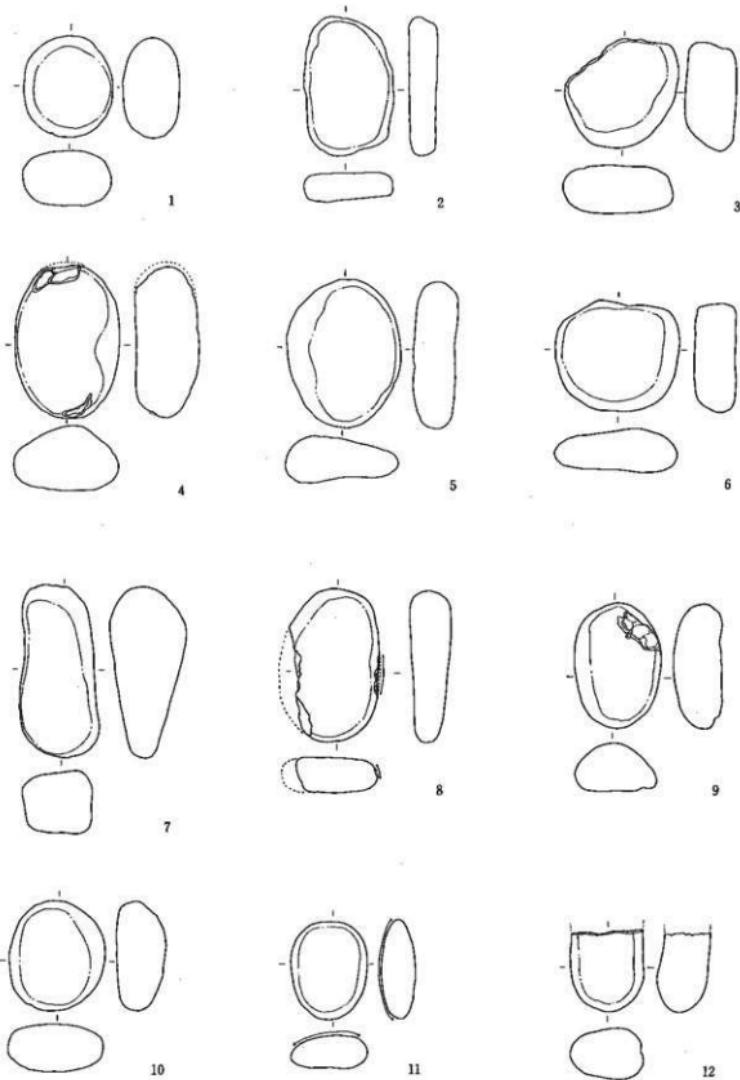
第14図 4号住居址実測図



第15図 4号住居址出土遺物実測図(1)



第16图 4号住居址出土遗物实测图(2)



第17圖 4號住居址出土遺物實測圖(3)

たのか疑問である。

床面：IV層まで掘り込んでいる。貼床が認められ、堅綴面となっている。

柱穴とピット：主柱穴4基と他に2基のピットを検出した。

竈：北東側の壁に付設され、若干南にずれて位置している。平らな花崗岩を組んで作った煙道をもつ。煙道は4m強の長さで煙の出口を除いて石の蓋が設けられている。一部を前半のトレンチ調査の際に破壊してしまったようだ。竈部は石と粘土を用いて作っている。焼土が10cmほど堆積していた。竈内から白玉を2点検出した。

規模と形態：一辺5.5m程度の方形を呈する。

出土遺物と所属時期：遺物は少なかったが、高坏1点と坏3点を出土した(第20図)。高坏は床面から、坏は竈と覆土中から出土した。竈から出土した坏(2)は底部に一孔が穿たれる。この住居址からは計2点の石製模造品(5、6)が出土した。

SB 6 (第21図)

覆土：黒褐色土(1)と暗褐色土(2)の堆積がみられる。

壁面：重複等により判然としない部分がある。壁高は20~30cmを計る。

床面：IV層の極浅い部分に床を作っている。貼床が認められ、堅綴面となっている。

柱穴とピット：柱穴は判然としないが、計8基のピットを確認した。

竈：北東側の壁の中央に付設される。平らな花崗岩を組んで作った煙道をもつ。煙道は4m強の長さで煙の出口を除いて石の蓋が設けられている。構築材にはSB 5のものよりも一回り大きな石を使っている。竈部焼土が10cmほどの厚さでみられた。竈内から長胴甕の底部と白玉が1点出土した。また、煙道の煙出口部分からまとまつた土器片が出土し、焼土が検出された。

規模と形態：一辺が5m前後の方形を呈すると推定される。

出土遺物と所属時期：後期鬼高式期の住居址である。長胴甕、坏等の遺物が出土している(第22図)。なかでも前年の調査の際に竈の付近から(床面直上)出土した長胴甕の口縁部のみの個体(7、8)は興味深い。他に白玉が計3点(竈1・覆土2)と鉄製の刀子が1点出土した(11~14)。

その他の遺構

(I) 積穴状造構1 (第23図)

位置：J-7 Gridにある。一部調査区外にある。

調査の経過：IV層上面にて黒褐色土の落ち込みを確認したため、掘り下げた。

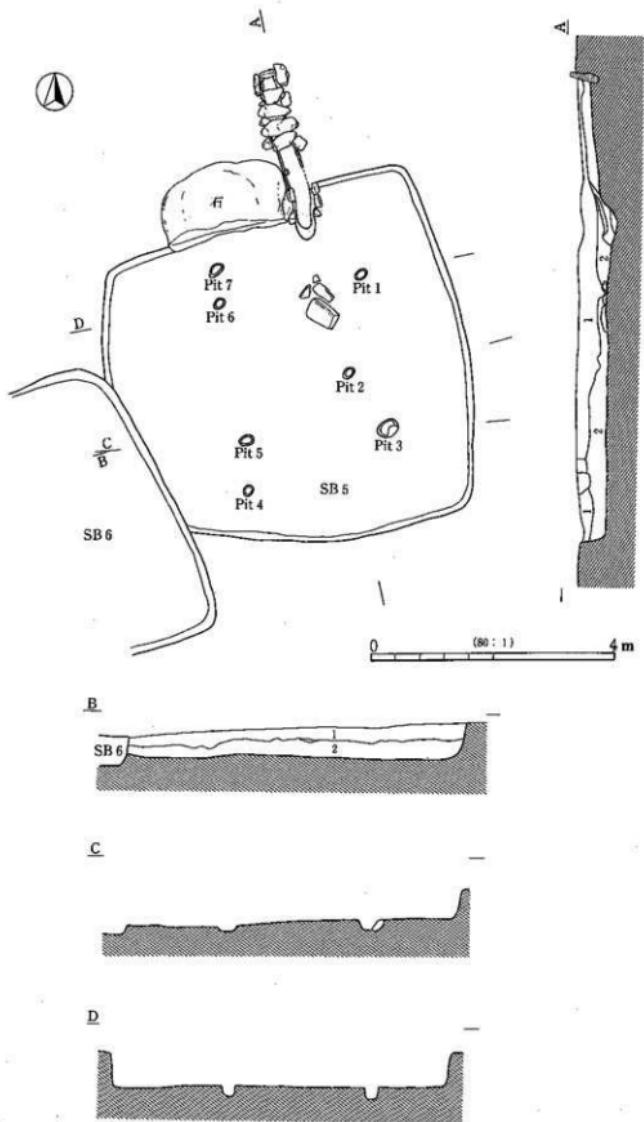
覆土：黒褐色土(1)と暗褐色土(2)の堆積がみられる。

壁面：壁高は20cmを数える。

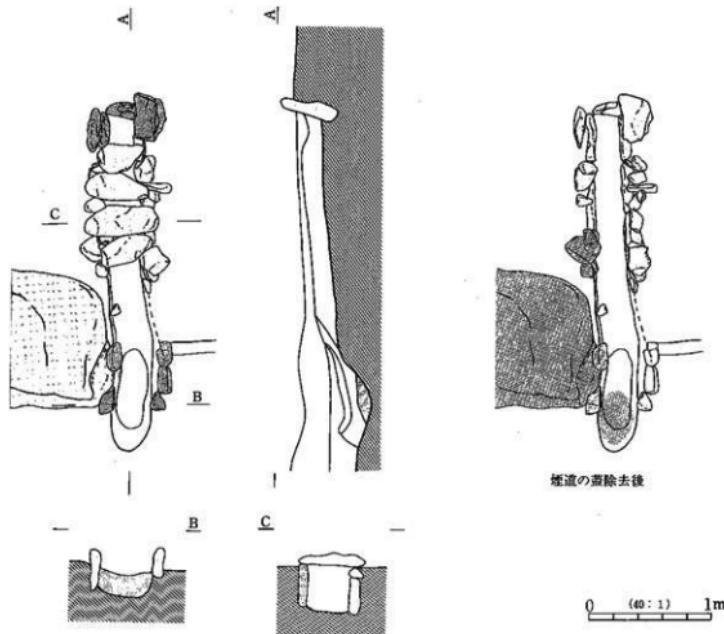
床面：IV層内で終結している。底面は締まっている程度である。

規模と形態：全体形は不明である。

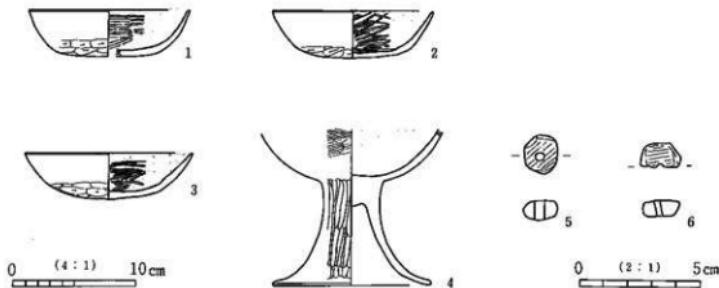
出土遺物と所属時期：遺構底部から光形の長胴甕(第23図-1)を検出した以外は、遺物はほとんどみられなかった。これにより古墳時代後期の所産と位置づけた。遺構の性格は住居址の可能性が強いが、竈や床面といった条件が揃わなかったので、積穴状造構とした。



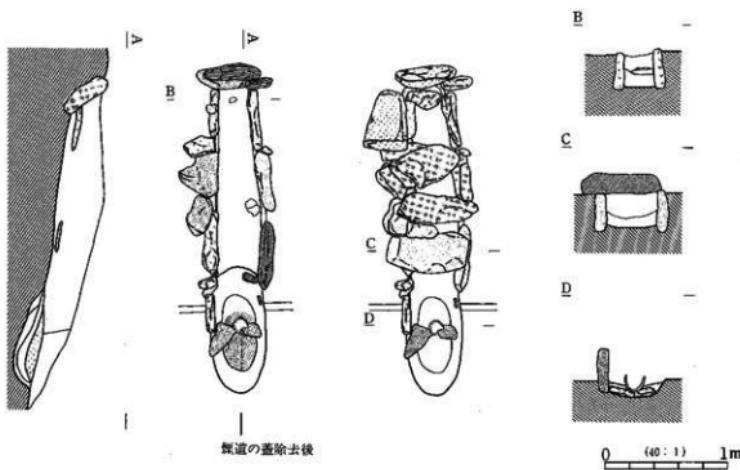
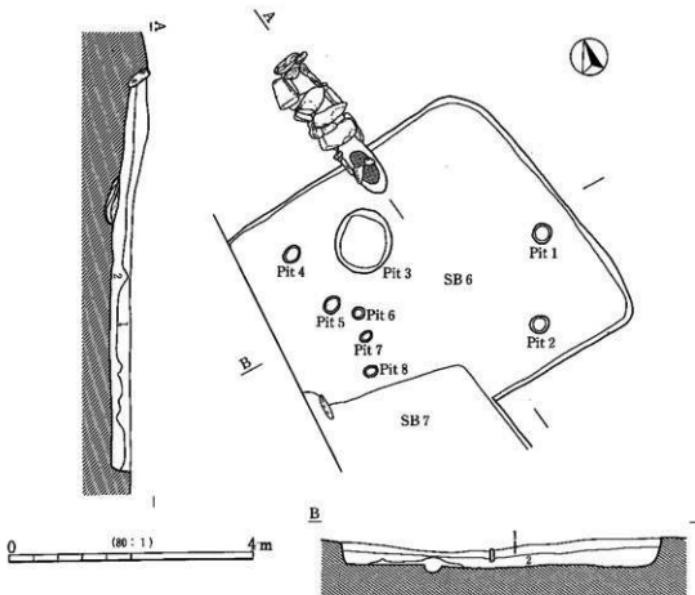
第18图 5号住居址实测图(1)



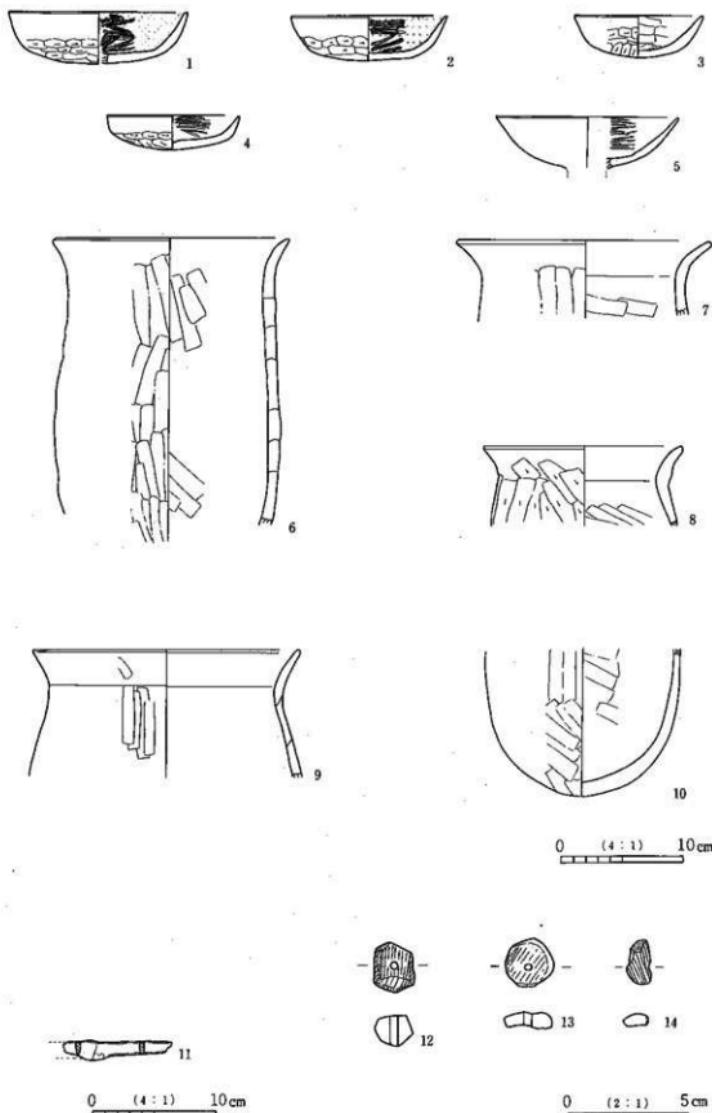
第19図 5号住居址実測図(2)



第20図 5号住居址出土遺物実測図



第21図 6号住居址実測図



第22图 6号住居址出土遗物实测图

(2) 3号土坑 (SK 3) (第24図)

位置：K-8 Gridにある。

調査の経過：IV層上面にて黒褐色土の落ち込みを確認したため、掘り下げる。

覆土：黒褐色土(1)と暗褐色土(2)の堆積がみられる。

規模と形態：直径1.5mの円形を呈する。深さは60cm。

出土遺物と所属時期：この遺構からは白玉2点（第24図-1、2）とウマの歯がまとまって出土した。その点では土壙としてもよかっただけかもしれない。他の遺物が皆無であったため、時期決定には慎重を要するが、白玉の1つが底部近くから出土していることから古墳時代の遺構とした。仮に後世の遺構としても白玉が2点も混入するのは考えにくい偶然である。遺構の性格についてはここでは触れないが、意図的に歯の部分だけを埋納している点は興味深い。なお、歯は計測可能なまで20本、重量は205gを数える。遺存体の動物種の鑑定は早稲田大学の金子浩昌氏による。詳細は後章に譲る。

遺構外出土遺物（第25図）

検出面から古墳時代のものと推定される小玉2個が出土した。出土地点は異なるが、同時に使用されていた個体であろうと思われる。数珠のように穴に紐状のものを通して使ったのだろう。石材には黒色の石を用いている。また、鉄鎌が1点出土している。

4 平安時代の遺構と遺物

平安時代の遺構は住居址2軒、小鍛冶遺構1基を検出した。

住居址

(1) 1号住居址 (SB 1) (第26図)

位置：H-6～7、I-6～7 Gridにある。

調査の経過：耕作土直下、II層上面にて竈の石が確認されたため、掘り下げる。15cmほど掘り下げるところで床面があらわれ、遺物が少量ではあるが出土した。前年のトレンチ調査の際に確認されていた遺構である。

覆土：黒褐色土の堆積がみられた。

壁面：壁高は15cm、一部搅乱によって失われる。

床面：貼床され、全面堅致面となる。

柱穴とピット：柱穴は確認できず。竈の脇からピットを1基確認した。小さめであるが、貯蔵穴であろうか。

竈：北西側の壁の中央に付設される。構築材である石と粘土が確認された。煙道も確認できた。

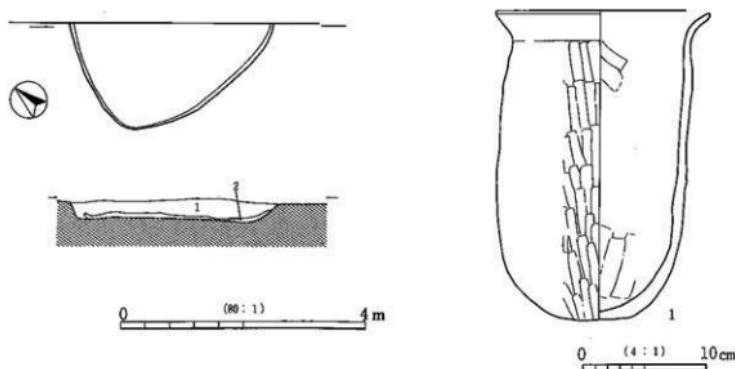
規模と形態：若干小さめで、一辺2.5m強の方形を呈する。

出土遺物と所属時期：遺物の量は少なかったが図示した4点が復元できた（第27図）。これらから平安時代（10世紀代）の所産であると考えられる。2点の甕はいわゆる武藏型甕である。

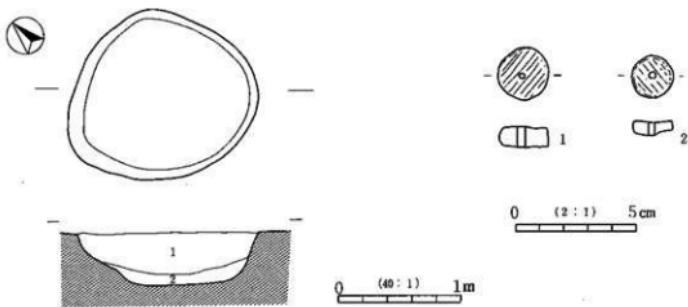
(2) 3号住居址 (SB 3) (第28図)

位置：I-6 Gridにある。一部調査区外にある。

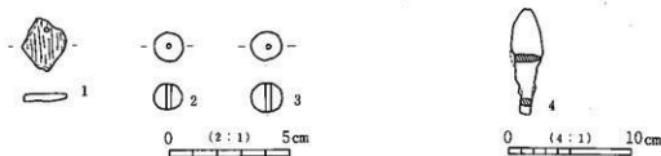
調査の経過：II層掘り下げ中に堅致面を検出したため、周辺を精査したところ竈の完形土器と竈を確認、



第23図 堪穴状造構1 実測図および出土遺物実測図



第24図 3号土坑実測図および出土遺物実測図



第25図 古墳時代の包含層出土遺物

住居址とした。

覆土：床面近くに炭化物が多く含む層がみられた。

壁面：確認することはできなかった。

床面：II層まで掘り込んでいる。貼床が認められ一部、堅緻面となっている。

柱穴とピット：確認できなかった。

竈：北東隅の壁の中央に付設される。構築材である石と焼土が検出された。

規模と形態：不明。

出土遺物と所属時期：全形の分かる資料に乏しいが、室内から4個体分の羽釜の破片が検出された。また、甕、皿なども出土している（第29・30図）。これらの出土遺物から平安時代（10世紀代）の住居址であると考えられる。また、炭化物に混じて炭化したオニグルミが1点出土した。

（3）9号住居址（SB9）（第31図）

位置：I-7～8、J-7～8 Gridにある。

調査の経過：IV層上面にて黒褐色土の落ち込みを確認したため、掘り下げる。10cm程下げたところで床面に到達した。

覆土：黒褐色土の堆積がみられる。

壁面：一部流失により不明な部分がある。壁高は10cm程ある。

床面：IV層内に床を作っている。貼床がみられるが、堅緻面にはなっていない。南側の床面は流失している。

柱穴とピット：確認できなかった。

竈：検出できなかった。

規模と形態：一辺5m程度の方形を呈すると思われる。

出土遺物と所属時期：遺物は少なかったが、平安時代（10世紀代）の住居址と考える。墨書き器が1点出土した（第31図-1）。「三口」とあり、2文字目は不明である。

その他の遺構

（1）小鐵冶遺構Ⅰ（第32図）

位置：F-5、G-5 Gridにある。

調査の経過：II層上面で黒色土の落ち込みと鉄滓の出土を確認したため、半裁した。フイゴの羽口の破片が覆土より出土した。

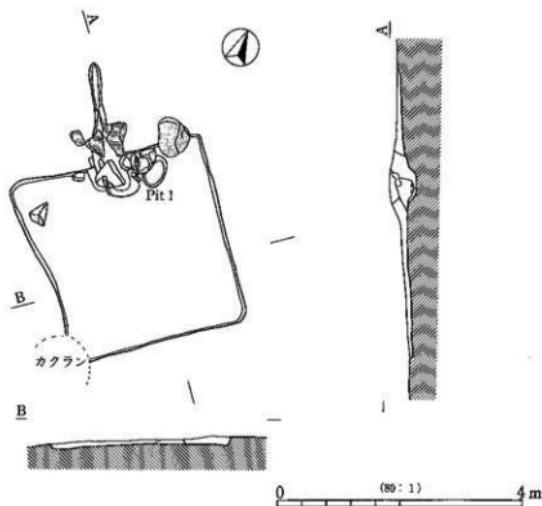
覆土：黒色土に焼土粒や炭化物、鉄滓が混じった土が堆積していた。

規模と形態：楕円に近い不定形な形をした穴であるが、最も長いところで1mほどあり、深さが30cmある。おそらく鍛冶炉（火床炉）であると考えられる。

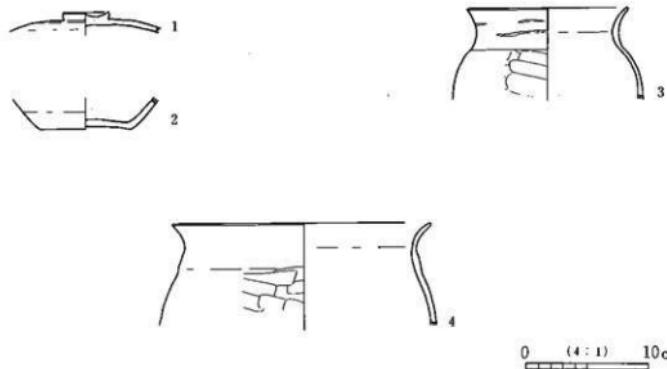
出土遺物と所属時期：覆土中から内面に鉄滓が付着し、底部に糸切り痕のみられる土師器壊の破片が出土した（第32図-3）。この遺物から推定すると、平安時代以降の遺構であると考えられる。本遺跡では中世以前の遺構は検出されていないので、平安時代の集落に伴う遺構と考えたい。なお、フイゴの破片は2点（第32図-1・2）、鉄滓は総重量1,480gが出土した。

包含層出土遺物（第33図）

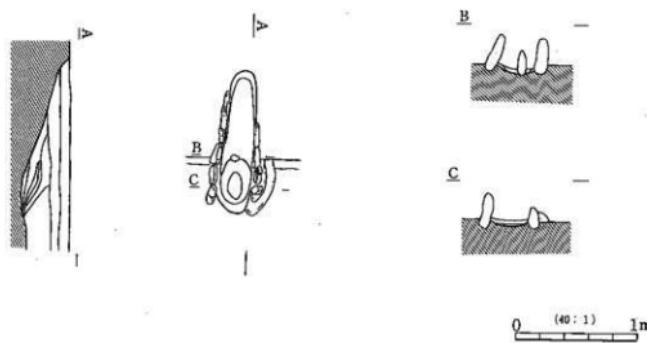
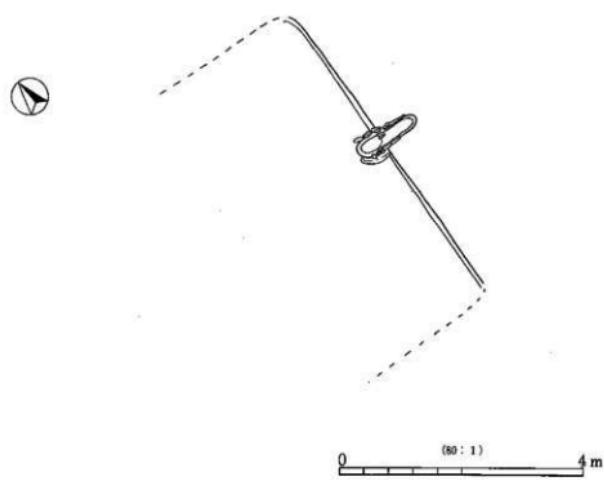
包含層から出土した完形資料を一括して掲載した（第33図）。1は灰釉陶器で口縁に掲載したものである。



第26図 1号住居址実測図



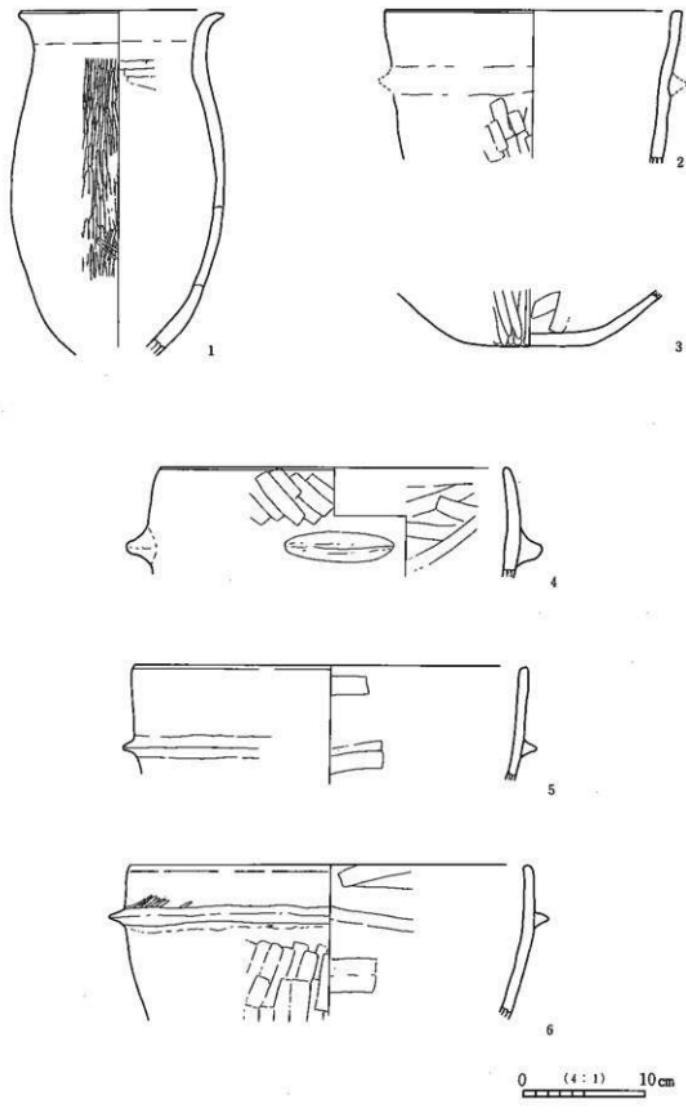
第27図 1号住居址出土遺物実測図



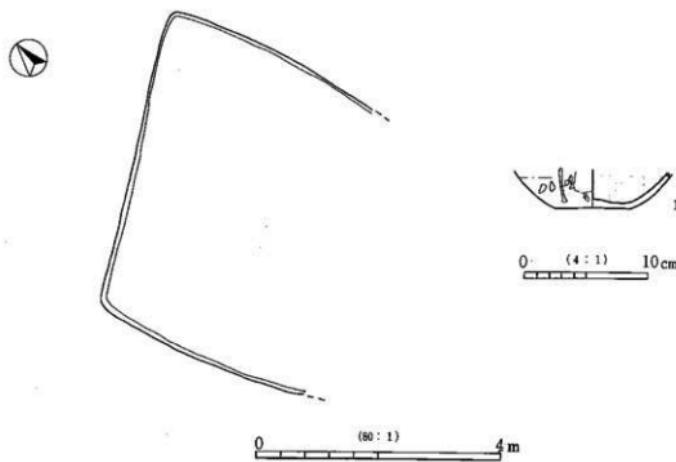
第28図 3号住居址実測図



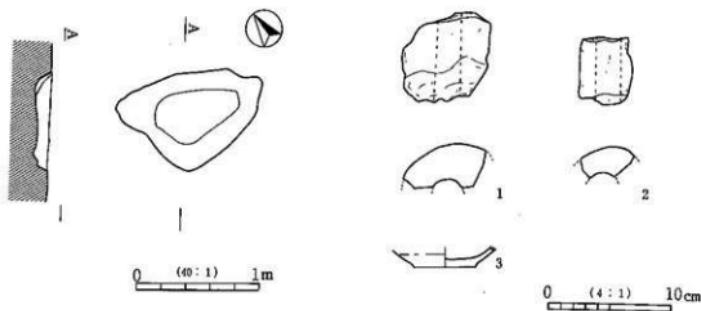
第29図 3号住居址出土遺物実測図(1)



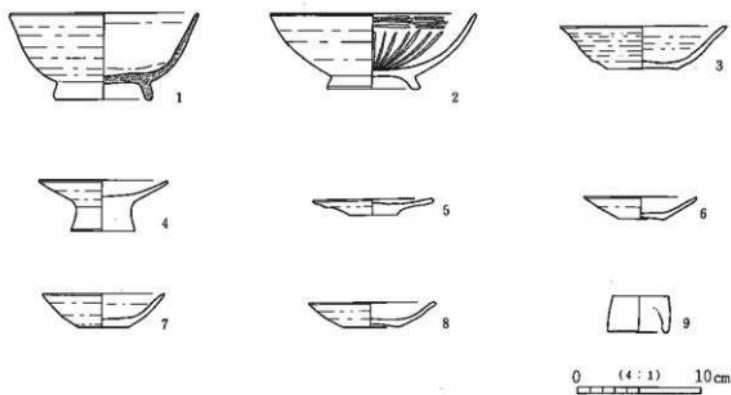
第30圖 3號住居址出土遺物實測圖(2)



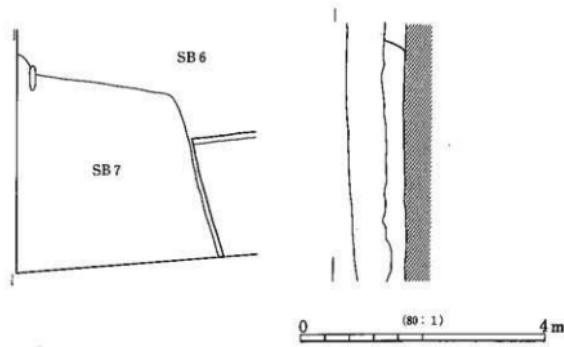
第31図 9号住居址実測図および出土遺物実測図



第32図 小窯冶遺構実測図および出土遺物実測図



第33図 平安時代の包含層出土遺物実測図



第34図 7号住居址実測図

その他、土師器の出土が多いが、破片資料が多く全景を知りうるものは少ない。9の資料は土製紡錘車であろうか。

5 時期不明の遺構

出土遺物がなく、時期決定が出来なかったものがあり、ここで紹介する。おそらく古墳時代または平安時代の所産であろう。

(1) 7号住居址 (SB 7) (第34図)

位置：E - 7 ~ 8 Gridにある。SB 6 と重複する。SB 6 より新。大部分が調査区外にある。

調査の経過：SB 6 の調査の途中で検出された。竪が見つかり、住居址と認識した。遺物は皆無であった。

覆土：黒褐色土の堆積がみられる。

壁面：不明。

床面：SB 6 の床面とはほぼ同レベルの高さ。IV層の極浅い部分に床を作っており、堅緑面となっている。

柱穴とピット：確認できなかった。

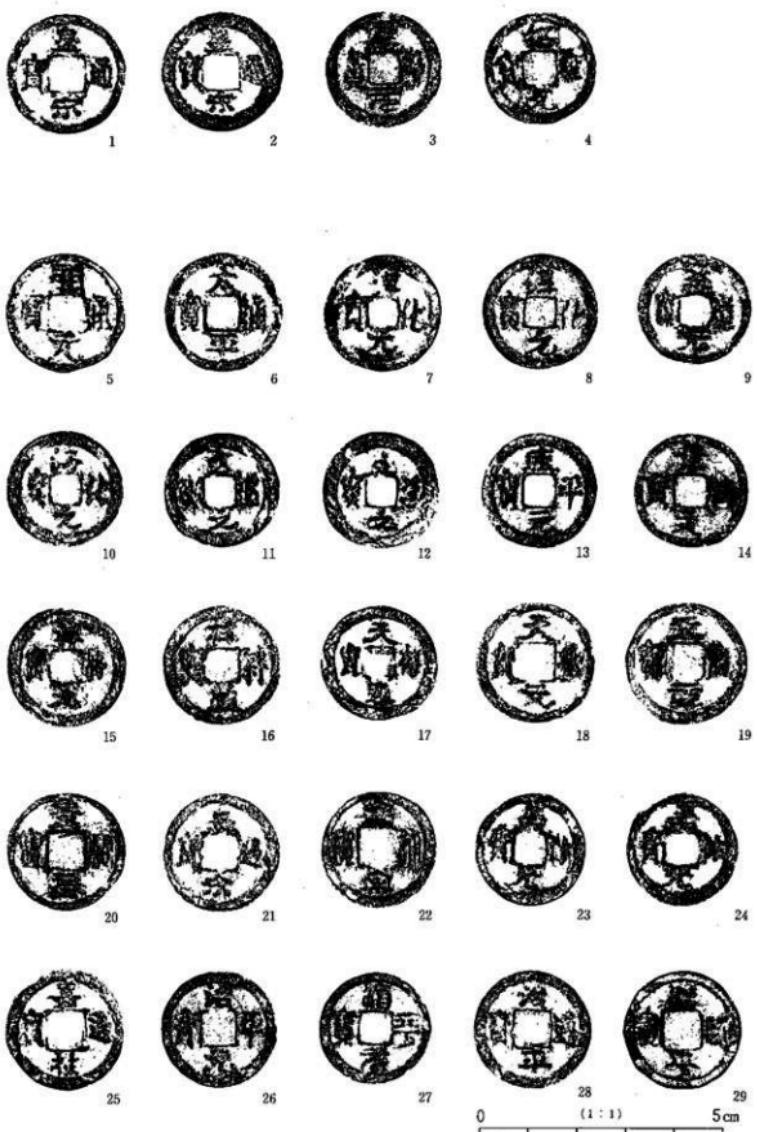
電：構造材である石と焼土が確認できた。

規模と形態：全体形は不明。

出土遺物と所属時期：SB 6 と重複しているが遺物は皆無であった。そのため古墳時代後期であるという以外は時期決定はできなかった。

6 中世の遺物 (第35・36図)

中世の遺構は検出されていないが、調査区内から4枚の渡来銭が出土した(第35図-1~4)。いずれも耕作土直下からの出土である。遺跡周辺は以前からこの種の渡来銭の出土が知られ、聞き取り調査によると以前には甕に入った大量の銭が用水路造成の際に出土したという。また、今回の場合は場整備による造成の際にも、43種、計259枚の渡来銭が収集された。そのほとんどは一箇所からまとめて出土し、もともとは銭の穴を紐か何かでつないでいたらしく、何枚かの銭が銷でくついた状態だったという。発掘資料ではないが出土状況から一括性を保証できるものである。このうちの1枚に「至大通宝」という元朝の銭があり(第36図-18)、少なくとも室町時代以降に一箇所にまとめられたものと思われる。甕などの容器は発見されなかっただが、埋納銭である可能性がある。また、調査区の北西に隣接する出早雄神社との関連も考えられる。参考資料として、発見された43種全部を掲載しておく(第35図-5~29、第36図)。なお、資料は発見者の田畠和秀氏のご厚意により寄贈されたものである。また、銭の鑑定も田畠氏によるものである。厚く御礼申し上げたい。



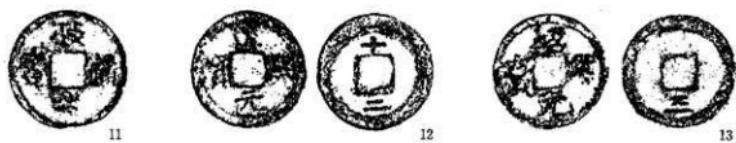
第35圖 墓田遺跡出土中臣波來錢(1)



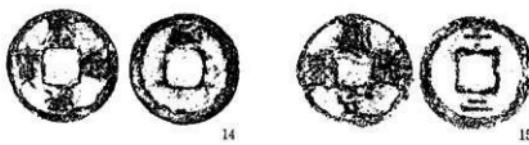
1 2 3 4 5



6 7 8 9 10



11 12 13



14 15



16 17 18

0 (1 : 1) 5 cm

第36図 境田遺跡出土中世渡来銭(2)

图版番号	名 称	铸 造 開 始 年	西 屢	圖版番号	名 称	标	銅 造 開 始 年	西 屢
35-1	皇宋通宝(真)	北宋 宝元二年	1 0 3 9	35-25	嘉祐通宝(真)		北宋 嘉祐元年	1 0 5 6
35-2	皇宋通宝(真)	北宋 宝元二年	1 0 3 9	35-26	治平元宝		北宋 治平元年	1 0 6 4
35-3	治平元宝(篆)	北宋 治平元年	1 0 6 4	35-27	治平元宝(篆)		北宋 治平元年	1 0 6 4
35-4	紹聖元宝(真)	北宋 紹聖元年	1 0 9 4	35-28	治平通宝(真)		北宋 治平元年	1 0 6 4
35-5	開元通宝	唐 武德四年	6 2 1	35-29	治平通宝(篆)		北宋 治平元年	1 0 6 4
35-6	太平通宝	宋 太平興國元年	9 7 6	36-1	熙寧元宝(真)		北宋 熙寧元年	1 0 6 8
35-7	淳化元宝(真)	北宋 淳化元年	9 9 0	36-2	熙寧元宝(篆)		北宋 熙寧元年	1 0 6 8
35-8	淳化元宝(行)	北宋 淳化元年	9 9 0	36-3	元豐通宝(真)		北宋 元豐元年	1 0 7 8
35-9	淳化元宝	北宋 淳化元年	9 9 0	36-4	元豐通宝(篆)		北宋 元豐元年	1 0 7 8
35-10	至道元宝(真)	北宋 至道元年	9 9 5	36-5	元祐通宝(真)		北宋 元祐元年	1 0 8 6
35-11	至道元宝(行)	北宋 至道元年	9 9 5	36-6	元祐通宝(篆)		北宋 元祐元年	1 0 8 6
35-12	至道元宝(草)	北宋 至道元年	9 9 5	36-7	熙宋元宝(真)		北宋 熙宋元年	1 1 0 1
35-13	咸平元宝	北宋 咸平元年	9 9 8	36-8	熙宋元宝(篆)		北宋 熙宋元年	1 1 0 1
35-14	景德元宝	北宋 景德元年	1 0 0 4	36-9	大觀通宝(真)		北宋 大觀元年	1 1 0 7
35-15	祥符元宝	北宋 大中祥符元年	1 0 0 8	36-10	政和通宝(真)		北宋 政和元年	1 1 1 1
35-16	祥符通宝	北宋 大中祥符二年	1 0 0 9	36-11	政和通宝(篆)		北宋 政和元年	1 1 1 1
35-17	天禧通宝	北宋 天禧年間	1 0 1 7 ~	36-12	淳熙元宝		南宋 淳熙元年~	1 1 7 4
35-18	天聖元宝(真)	北宋 仁宗天聖元年	1 0 2 3	36-13	紹熙元宝		南宋 紹熙元年~	1 1 9 0
35-19	天聖元宝(篆)	北宋 天聖元年	1 0 2 3	36-14	慶元通宝		南宋 慶元元年~	1 1 9 5
35-20	景祐元宝(真)	北宋 景祐元年	1 0 3 4	36-15	嘉定通宝		南宋 嘉定元年	1 2 0 8
35-21	皇宋通宝(真)	北宋 宝元二年	1 0 3 9	36-16	紹定通宝		南宋 紹定元年	1 2 2 8
35-22	皇宋通宝(篆)	北宋 宝元二年	1 0 3 9	36-17	皇宋元宝		南宋 宝祐元年	1 2 5 3
35-23	至和元宝(真)	北宋 至和元年	1 0 5 4	36-18	至大通宝		元 至大三年	1 3 1 0
35-24	瀛祐元宝(真)	北宋 瀛祐元年	1 0 5 6					

表2 埤田遺跡出土銅錢一覽

1 石 繩

図版番号	長さcm	幅cm	厚さcm	重さkg	基部形態		側辺部形態	欠損部位	自然面	石材	形態分類	出土地点	その他
					有無	形							
10-1	1.5	1.5	0.3	0.5	無	c	c	完	-	黒曜石	B 2	包含層	
10-2	1.9	1.4	0.4	1.1	-	a	d	-	-	黒曜石	-	包含層	
10-3	1.9	1.5	0.3	0.5	無	b	c	b	-	黒曜石	B 2	包含層	
10-4	2.0	1.4	0.4	1.2	無	-	c	-	-	黒曜石	-	包含層	
10-5	2.5	1.5	0.4	1.0	無	a	c	f	-	黒曜石	B 1	包含層	
10-6	2.4	1.7	0.7	2.3	無	a	c	完	-	黒曜石	B 1	包含層	
10-7	2.2	1.3	0.4	0.8	無	c	c	完	-	黒曜石	B 2	包含層	
10-8	1.8	1.4	0.2	0.5	無	a	c	完	-	黒曜石	B 1	包含層	
10-9	2.7	1.6	0.3	1.2	無	b	c	完	-	黒曜石	B 2	SB3段土	
10-10	2.0	1.5	0.4	1.9	無	a	c	b	-	黒曜石	B 1	包含層	
10-11	2.2	1.6	0.5	1.2	無	a	a	完	-	黒曜石	B 1	包含層	
10-13	3.6	1.7	0.4	2.0	無	a	a	b	-	黒曜石	B 1	包含層	
10-14	3.1	1.7	0.5	2.0	無	a	c	b	-	黒曜石	B 1	包含層	
10-15	2.3	1.2	0.6	1.9	無	-	a	e	-	黒曜石	-	SB3段土	
10-16	2.8	1.3	0.4	1.1	無	b	c	b	-	黒曜石	B 2	SB3段土	
10-17	2.3	1.4	0.3	0.7	無	a	c	b	-	黒曜石	B 1	SB6段土	
10-18	2.4	1.5	0.5	1.0	無	c	a	b	-	黒曜石	B 2	SB6段土	
10-19	1.9	1.3	0.2	0.3	有	-	a	完	-	黒曜石	E	包含層	
10-12	2.3	1.7	0.4	1.0	無	a	a	b	-	黒曜石	B 1	包含層	

2 石 些

図版番号	長さcm	幅cm	厚さcm	重さkg	数	型	刃長cm	刃幅cm	平面形	基盤の有無	欠損部位	全体形	石材	形態分類	出土地点	その他
11-1	5.3	3.1	0.9	11.8	1	片刃	5.0	0.6	a	有	完	a, b	頁岩	a	包含層	
11-2	2.2	1.8	0.5	1.4	1	両刃	2.1	0.2	a	有	完	-	頁岩	a	包含層	
11-3	3.6	2.5	0.7	9.1	1	両刃	2.1	0.3	-	有	b	-	頁岩	c	包含層	
11-4	2.5	2.1	0.5	2.1	1	両刃	0.6	0.3	-	有	b	-	黒曜石	a	包含層	
11-5	3.3	2.2	0.9	4.3	1	両刃	3.2	0.4	a	有	完	a	黒曜石	a	包含層	

表3 境田遺跡出土石器觀察表(1)

3 石 錐

図版番号	法 量			機 能 部			欠損部位	自然面	全体形	石 材	形態分類	出土地点	その他	
	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	数	調整長さ cm	幅 cm	厚さ cm	断面形					
11-6	2.2	1.6	0.5	1.9	1	—	—	—	—	C	—	II	黒塊石	
11-7	2.4	1.7	0.7	2.9	1	兩面	1.3	1.4	0.5	c	光	II	黒塊石	
11-8	5.9	0.9	0.8	4.1	1	兩面	5.9	0.8	0.8	c	完	—	II	黒塊石

4 打製石斧

図版番号	法 量			刃 部			欠損部位	自然面	石 材	形態分類	出土地点	その他
	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	刃幅 cm	平面形						
12-1	14.0	7.4	3.2	390	7.4	1	—	完	b, c	玄武岩	G	包含層
12-2	12.0	8.6	3.4	270	1.2	—	—	—	—	頁岩	—	包含層
12-3	11.8	4.3	2.0	125	0.8	—	—	—	—	安山岩	—	包含層
12-4	8.3	5.5	2.9	170	5.2	3	3	完	—	玄武岩	E-1	包含層
12-5	7.3	4.8	1.5	60	4.1	4	—	5	—	頁岩	—	包含層
12-6	7.6	3.4	1.4	42	3.2	3	3	完	a,b,c	玄武岩	C-2	包含層
12-7	10.5	5.3	2.6	160	—	—	4	2	—	安山岩	C-1	包含層

5 刃 鋸

図版番号	法 量			刃 部			刃長cm	幅cm	石 材	出土地点	その他
	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	数	型					
11-9	5.4	4.0	1.3	35	1	両刃	4.9	0.4	頁岩	包含層	
12-8	8.7	5.1	1.0	50	2	片刃	3.6	0.9	安山岩	包含層	
12-9	8.9	4.9	1.1	36	2	両刃	5.8	1.2	—	包含層	
12-10	9.4	4.8	1.1	50	2	片刃	7.8	0.4	安山岩	包含層	
12-11	7.6	3.8	1.6	60	2	両刃	8.2	0.5	安山岩	包含層	
12-12	8.7	4.5	1.3	62	2	両刃	4.8	0.7	玄武岩	包含層	
							5.0	1.0	安山岩	包含層	
							3.2	1.0	—	包含層	

表4 境田遺跡出土石器觀察表(2)

図版番号	法 量			数	刃 部		石 材	出土地点	その他
	長さcm	幅cm	厚さcm		重きg	片刃			
12-13	8.8	5.2	1.1	50	2	兩刃	5.3	0.6	安山岩 包含層
12-14	7.5	4.1	1.6	40	1	兩刃	4.6	0.9	包含層
12-15	6.9	5.2	1.7	70	1	兩刃	6.2	0.3	安山岩 包含層
13-1	6.8	4.0	1.2	75	1	片刃	6.7	1.5	安山岩 包含層
13-2	4.9	4.9	1.6	70	—	兩刃	5.0	0.6	玄武岩 包含層
13-3	6.8	3.4	1.2	28	2	兩刃	4.6	0.7	玄武岩 包含層
13-4	6.6	3.6	1.0	25	1	片刃	5.1	0.4	頁岩 包含層
13-5	5.7	3.7	1.4	38	1	兩刃	2.8	0.7	頁岩 SB15
13-6	6.9	5.1	1.3	50	1	兩刃	6.3	0.8	頁岩 包含層
13-7	6.5	4.6	1.3	39	3	兩刃	6.9	0.9	頁岩 包含層
						片刃	5.8	0.8	玄武岩 包含層
13-8	5.0	4.3	1.2	30	2	片刃	4.3	0.6	頁岩 包含層
						兩刃	6.4	0.9	頁岩 包含層

表5 境田遺跡出土石器觀察表(3)

2 古代土器の器種分類

食 器

種類	器種名	器種説明
土 壺	壺 A	ロクロ調整の底部回転糸切りの壺で、体部が直線的に開く。法量によりII、IIIに分けられる。黒色土器壺A、須恵器壺Aと同形態をなす。
	壺 C	明赤褐色の繊密な密度を有する壺で、底部回転糸切りの後へラ削り、体部を外面手持ちへラ削り・ヘラ磨き、内面に鋸齒状の略文を施すものもある。いわゆる甲斐型壺。
	壺 D	非ロクロ調整の丸底の壺。底部外側から底部にかけて手持ちへラ削り。口縁部にはヨコナデを施す。内面・あるいは内外面に横方向のヘラ磨きを施し、黒色処理するものもある。
	壺 E	非ロクロ調整の浅い盤状の壺で、手法は壺Dに共通するが、口径は壺Dに比べ大きい。
	壺 F	非ロクロ調整の壺で、体部下半に棱を持つ。体部内面をヨコヘラ磨き、外側は棱より下を手持ちへラ削り、上をヨコヘラ磨きで調整するのが一般である。口縁部の形態は多様である。
	壺 壺	A～F以外の壺で、略文を施す壺内系の壺、非ロクロ調整の不定形な壺など。
器 器	壺 C	ロクロ調整の有台の壺。体部が直線的に伸びるものと、腰が強く張るものがある。腰が強く張るものには小型の小窓がある。
	皿 A	ロクロ調整の扁平な土器で法量によりI・IIがある。小型のIIは口縁部を折り曲げて直立する面を作る。
	皿 盤	ロクロ調整の皿Aの口縁部をつまみあげたもの。有台と無台のものがある。
	盤 A	ロクロ調整で口径30～35cmの大型の器。高い脚台をもつ。
	盤 B	足高台を有する身の浅い浅型の盤。法量によりI、IIに分けられる。
	鉢 A	ロクロ調整で口径20cmを越える大型の鉢。壺Aと相似形である。
黒 色 土 器 A	高 壺	非ロクロ調整で壺形の高窓を付したものの、脚台を伏したものの。
	高 鉢	非ロクロ調整で壺形の小型の鉢。形態はバラエティに富むがここでは一括する。
	壺 A	切り離しは回転糸切りで多くは未調整であるが、糸切りの後底部・底部端面をへラ削り調整するものもある。法量によりI・IIに分けられる。
	壺 壺	内湾気味に立ち上がる体部に、高台を付したものである。土器器の壺同様、体部が直線的に伸びるものと、腰が強く張るものがある。小型の小窓もある。
	皿 B	直線的に伸びる偏平な体部に、高台を付した皿である。類例は少ないが、口縁部を波状に被打たせたものもある。
	鉢 A	壺Aの相似形で、口径20cm以上の大型のもの。片口を付するものもある。
黒 色 土 器 B	鉢 鉢	尖り底から体部を開き、口縁部で内溝する鉢鉢模様の鉢。
	蓋	天井部に偏平なつまみをつける蓋で、口縁部は折り曲げることなく丸く納めるのみである。
	壺	黒色土器Aの壺と同形態の器。小型の小窓もある。
黒 色 土 器 C	皿 B	黒色土器Aの皿Bと同じ形態の皿。類例は少ない。
	耳 皿	土器器耳皿と同じ形態。有台と無台のものがある。
須 惠 器	皿 B	黒色土器Bと同じ形態の皿。類例は少ない。
須 惠 器	壺 A	直線的に開く体部をもつ無高台の壺、底部は①へラ切り未調整、②へラ切り+へラ削り、③静止糸切り、④回転糸切りなどの調整がある。壺Aとセッタをなすものもある。
	壺 B	壺形の体部に高台を付した形態で、壺Bとセッタをなす。法量によりI～VIに分類できる。
	壺 C	壺Bの高台がはずれた形態で、底部切り放し後底部全面或は周縁をへラ削りする。
	壺 D	丸底で、口縁部内面に立ち上がりを持つ。古墳時代からの伝統的器種である。
	壺 蓋 A	壺Aに対応する蓋で、内面に造りが付き、天井部に偏平な宝珠形のつまみを付ける。
	壺 蓋 B	壺Bに対応する蓋で、口縁端部を折り曲げる。天井部に偏平なつまみを付ける。
須 惠 器	壺 A	無高台で体部を内湾させるもの。底径が口径に比して小さい。

表6 古代土器の器種分類一覧(1) (長野県産文化財センターほか1990より抜粋)

種類	器種名	器種説明
須恵器	塊 B	全形を示すものはないが、金属鏡を模倣したと考えられるもので、高台を付す。体部の腰が強く張り、丸みをもって立ち上がり口縁部で外反する。環状のつまみを付す掩盖と対応する。
	皿 B	偏平で直線的に聞く体部に高台を付けるもの。灰釉陶器・黒色土器の皿Bに類似する皿。
	盤	浅い体部で、口縁部が強く折り返されたように立ち上がる。やや高めの高台が付される。
	环 A	小さい底部から体部は直線的に聞く。頭部で緩くしまって口縁部で外反する。大小の法量がある。ロクロナデ調整で薄手である。
	体 B	底または尖り底から体部を開き、口縁部で強く内湾する鉢。鉢を模倣したと考えられる。
	鉢 C	逆船体型の体部に厚めの円盤状の台をつけたもの。いわゆる擂鉢。
軟質須恵器	环 A	須恵器环Aの系譜のなかで考えられるが、体部内面の見込部のオサエがなく底部内面から体部にかけて滑らかに立ち上がる。焼板も軟質でほとんどに黒斑が残る。法量は須恵器环 IIに対応するもののである。
灰釉陶器	塊 A	体部にわずかに丸みをもち直線的に聞く形態で、梯形あるいは三日月様の高台を付するもの。底部が偏平で体部下半が強く張り出し、体部の立ち上がりが強い形態を取るものがある。
	皿	いわゆる丸皿。
	段 皿	いわゆる段皿。
	稜 皿	いわゆる稜皿。
	耳 皿	いわゆる耳皿。

煮炊具

種類	器種名	器種説明
土	甕 A	輪積み成形の後、内外面をナデ調整する長倒甕。明黄褐色で胎土に雲母片を多量に含む。器面を刷毛目で調整する長削甕。
	甕 B	暗褐色の胎土で体部外面をヘラ削りして薄く仕上げる。いわゆる武藏型甕。
	甕 C	赤褐色・胎土は要Aに共通するが、ロクロ(回転台)調整を行なう長削甕。
	甕 D	球形鉢の背の低い甕。要Aに共通する胎土をもち、器面をヘラ磨きするものが多いが、ナデ調整で仕上げるものもある。
	甕 F	甕Fに共通する球形鉢の甕であるが、器面をハケ調整している。
	小型甕 A	胎土・調整が要Cに共通する、器面ナデ調整の小型甕。
師	小型甕 B	胎土・調整が要Bに共通する、器面ナデ調整の小型甕。
	小型甕 C	胎土・調整が要Cに共通する、体部外面を削り調整する小型甕。
	小型甕 D	ロクロ調整の小型甕で体部にカキ目またはロクロ目を明瞭に残す。底部に糸引痕を残す。
	小型甕 E	器表を粗くナデ調整で仕上げる小型甕。形態は不安定である。
	瓶 A	甕 Aと要Fと共に共通胎土、調整による瓶である。大形と小形があり、大形のものには角状の把手が付くことが多い。
器	瓶 B	形態の全容を知ることのできる資料に恵まれないが、体部外面はハケ調整で底のないもの。
	瓶 C	ハケ調整である点は瓶Bに近いが、底部を円盤状に折り返す須恵器の瓶の形態に類似する。
	瓶 D	羽釜の底部を抜いたもの。
	羽釜 A	体部上部に鈎状の突帯を付したもので、厚手。内外面をナデ調整する。平底、丸底の両者がある。体部の調整に叩き技法を用いたものもある。
	羽釜 B	調整手法は羽釜Aに共通するが、鈎が1連で体部を巡ることなく、3・4箇所で切れる。
	足釜	形態の全容を知るものはないが、脚部の存在から足釜とする。
	鍋	平らな底部で、稍量に立つ浅い体部を有する。把手を持つものもある。
	円筒形土器	体部の直径15cm前後の円筒形を呈するもので体部外面をハケ調整する。

表7 古代土器の器種分類一覧(2) (長野県埋蔵文化財センターほか1990より抜粋)

種類	器種名	器種 説明
須恵器	瓶	厚手で、器面全体をロクロナデ調整することを除けば土師器の瓶Cと同一の形態をなす。

貯蔵具

種類	器種名	器種 説明
黒色土器B	長頸壺	須恵器・灰陶陶器の長頸壺・小形の広口瓶の形態に類似する。粘土縦積み上げ成形、ロクロ調整で器面をヘラ磨きで丁寧に磨き黒色処理する。
	短頸壺	須恵器・灰陶陶器の短頸壺の形態に類似する。長頸壺同様、粘土縦積み上げ成形、ロクロ調整で器面をヘラ磨きで丁寧に磨き黒色処理する。
須	長頸壺A	体部から細い頸部が直立気味に伸びるもので、体部が眼球を呈するものをいう。口縁部で折り返し口縁帯を作る。肩に把手を付するものなどがある。
	長頸壺B	体部は肩の部分で屈曲し、口縁部がラッパ状に聞くもの。頸部の接合部分にリング状の凸帯を貼付する。細い胴に緩やかに外反しながら折り返し無く聞く口を有する小形の壺。体部・口頸部とともにロクロ目が顯著である。底部に糸引き瓶を残す。
	長頸壺C	肩が強く張る短頸壺で高台の付くもの。口縁部は短く直立して端部は丸くおさめられる。壺と組み合わせとなる。
	短頸壺A	小型の短頸壺、高台は貼付されない。
	短頸壺B	体部がやや長い形態で頸部を直立に立てる。底部は回転糸切り無調整のものが多い。
	短頸壺C	体部の形態は短頸壺に類似するが、口縁部で強く外反し口縁帯を作る。
	短頸壺D	体部の形態は短頸壺に類似するが、口縁部を付するもの。
甕	甕 A	卵形の体部に外反する口頸部を付するもの。形に双耳あるいは四耳を付する。
	甕 B	卵形の体部に直立する短い口頸部を付するもの。形に双耳あるいは四耳を付する。
	甕 C	卵形の体部に強く外反する短い口頸部を付するもの。
	甕 D	平底の甕で脚部に凸帯を回し耳状の突起を付するもの。佐沢治によって「凹唇付四耳甕」と証されたもの。
器	甕 E	肩の張った広口の甕で、肩部やや下に把手を付するものもある。
	甕	体部に注口を有する甕で、一般的呼称に従う。
	平瓶	偏平な体部で、口縁部を火井の一方の縁に付す。
	水瓶	卵形の体部に細長い口頸部を付せるもの。一般的呼称に従う。
	横瓶	横に長い俵形の体部の横腹に短い口頸部を付するもの。一般的呼称に従う。
灰陶陶器	長頸壺	一般的呼称に従う。
	短頸壺	一般的呼称に従う。
	平瓶	一般的呼称に従う。
	小瓶	一般的呼称に従う。
	淨瓶	一般的呼称に従う。
	花瓶	一般的呼称に従う。
	広口瓶	一般的呼称に従う。

表8 古代土器の器種分類一覧(3) (長野県埋蔵文化財センターほか1990より抜粋)

(注) 表6～8及び第37・38図は以下の文献を引用させていただいた。

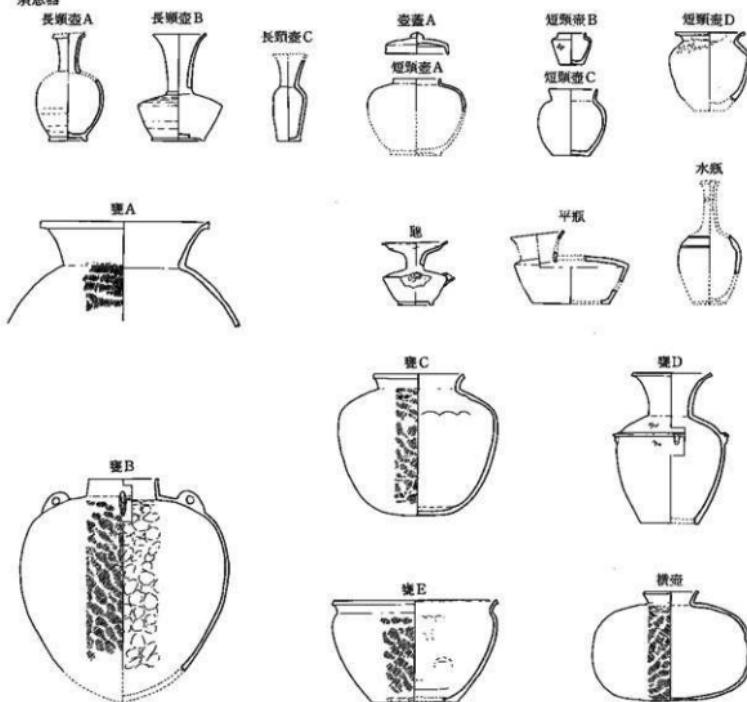
「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4—松本市内その1— 総論編」 長野県埋蔵文化財センター
—ほか 1990



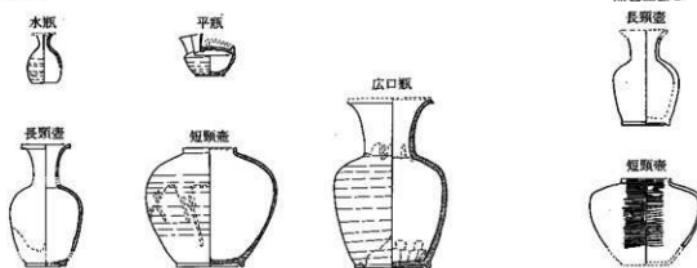
第37図 古代土器の器種分類(1)

貯蔵具

須恵器



灰釉陶器



長野県埋蔵文化財センターほか1990年再トレー

第38図 古代土器の器種分類(2)

3 古代土器觀察表

番号	出土地点	器種	種類	色	調	胎	土	焼成	製作方法の特徴	残存率
27-4	SB1 床面	要C	土師器	暗赤色	長石を含む	良 好	外腹へラ削り、武藏削邊			1/4
27-1	SB1 床面	环壺	須志器	暗灰色		良 好	ロクロ調整			1/2
27-3	SB1 床面	小型要C	土師器	暗褐色		良 好	外腹へラ削り、武藏削邊			1/5
27-2	SB1 床面	环A	須志器	褐色		良 好	ロクロ調整			1/5
29-1	SB3 カマド	环A	土師器	暗赤褐色	窑母片を含む	砂粒	良 好	ロクロ調整、並摺回転糸切り		2/3
29-2	SB3 カマド	皿A	土師器	明褐色		良 好	ロクロ調整			完
30-1	SB3 床面	要B	土師器	暗赤褐色		良 好	内外腹へケ調整、頭と側ナデ			2/3
30-2	SB3 カマド	羽釜A	土師器	暗赤褐色	窑母片を含む	良 好	体部外腹調整ナケ、その他窓いナデ			1/6
30-3	SB3 カマド	羽釜	土師器	暗褐色	黑色粒子を含む	良 好	内外腹へケ調整、頭と側ナデ			1/8
30-4	SB3 カマド	羽釜B	土師器	暗赤褐色	窑母片を含む	良 好	頭へ口縁部へケ調整			1/10
30-5	SB3 カマド	羽釜A	土師器	暗赤褐色	窑母片を含む	良 好	体部内外腹調整不明、一部にハケの跡を残す			1/10
30-6	SB3 カマド	羽釜A	土師器	暗赤褐色	窑母片を含む	良 好	体部内外腹へケ調整			1/8
15-1	SB4 床面	环D	土師器	暗褐色		良 好	体部側へラ削り 内 頭ナデ、底部へラ削り			完
15-2	SB4 床面	小鉢	土師器	褐色		良 好	体部側へケ調整			2/3
15-3	SB4 床面	窓坏	土師器	赤褐色		良 好	环部側へラミガキ、脚部側へラミガキ、脚部側へラミガキ、黑色處理			完
15-4	SB4 床面	瓶	土師器	赤褐色	長石を含む	良 好	口縁付近側へラミガキ、頸部側へラミガキ、体部側へラミガキ			完
15-5	SB4 床面	小型要B	土師器	褐色	赤色粒子を含む	良 好	外 ハケ削除 (内 頭ナデ)			完
15-6	SB4 床面	小壺	土師器	外 黑褐色		良 好	体部側へラミガキ、口縁側ナデ、黑色處理			完
15-7	SB4 床面	瓶	土師器	暗褐色		良 好	外 体部側へラミガキ、底部へラ削り (内 頭ナデ)			2/3
16-1	SB4 カマド	要B	土師器	褐色		良 好	内外腹へケ調整、底部へラ削り			2/3
16-2	SB4 カマド	要B	土師器	暗褐色	赤色粒子を含む	良 好	内外腹へケ調整、口縁側ナデ			1/6
16-3	SB4 カマド	要B	土師器	赤褐色	長石を含む	良 好	内外腹へケ調整	口縁側ナデ		1/4
16-4	SB4 カマド	要B	土師器	暗褐色		良 好	内外腹へケ調整	口縁側ナデ		1/3
16-5	SB4 床面	要F	土師器	褐色		良 好	内外腹へケ調整			1/3
20-4	SB5 床面	窓坏	土師器	明褐色	砂粒を含む	良 好	脚部外腹側へケ調整 (内 頭ナデ)	环部側黑色處理		2/3
20-1	SB5 床面	环D	土師器	暗褐色		良 好	体部～底部～テ削り、口縁部側ナデ	内 槌へラミガキ、黑色處理		1/4

表 9 塙田遺跡出土古代土器觀察表(1)

番号	出土地点	器種	縦	横	深	調	胎	土	焼成	製作技術の特徴	検査結果
20-2	SB5 カマド	壺D	土師器	褐色					良 好	外)底部一辺部へラ削り、口縁部備ナデ 内)側部ミガキ、黒色處理 底部穿孔	完
20-3	SB5 床面	壺D	土師器	褐色					良 好	外)底部一辺部へラ削り、口縁部備ナデ 内)側ヘミガキ、黒色處理	完
22-1	SB6 肥土	壺D	土師器	暗褐色	長石を含む				良 好	底部ヘラ削り、内部ヘラミガキ、内部黑色處理	1/3
22-2	SB6 床面	壺D	土師器	黄褐色					良 好	底部ヘラ削り、内部ヘラミガキ、内部黑色處理	完
22-3	SB6 床面	壺D	土師器	黄褐色					良 好	底部ヘラ削り、内部ヘラミガキ、内部黑色處理	1/3
22-4	SB6 小型壺D	土師器	明黄褐色						良 好	底部ヘラ削り、内部ヘラミガキ、ヘンガタク付	3/4
22-5	SB6 床面	窓D	土師器	黄褐色					良 好	外)面十字、内面ヘミガキ	1/4
22-6	SB6 床面	窓D	土師器	黄褐色	砂粒を含む				良 好	外)面ハケ調整	2/3
22-7	SB6 床面	窓D	土師器	赤褐色	砂粒を含む				良 好	外)面ハケ調整	1/5
22-8	SB6 床面	窓D	土師器	黄褐色	砂粒を含む				良 好	外)面ハケ調整	1/4
22-9	SB6 床面	窓D	土師器	黄褐色	砂粒を含む				良 好	外)面ハケ調整	1/5
22-10	SB6 カマド	壺D	土師器	黄褐色					良 好	外)面ハケ調整	1/4
23-1	肥土洗掘1 底板	甕B	土師器	黄褐色					良 好	外)面ハケ調整	完
31-1	SB9 床面	壺A	黑色土器A	赤褐色					良 好	クロロ調整、底部回転糸切り、墨書き器「三□」	1/3
32-1	小形過錐 瓢土	トイゴ	土師質	赤褐色					良 好	鉛溶竹清	-
32-2	小形過錐 瓢土	トイゴ	土師質	明褐色					良 好	クロロ調整、底部回転糸切り、内面に鉛溶竹清	1/4
32-3	小形過錐 瓢土	壺A	土師器	明褐色	赤色粒子を含む				良 好	クロロ調整、底部回転糸切り	2/3
33-1	包含層	瓶	灰釉陶器	灰白色	良質	砂粒を含む			良 好	クロロ調整、底部回転糸切り	2/3
33-2	包含層	瓶	黑色土器A	赤褐色					良 好	クロロ調整、底部回転糸切り	1/2
33-3	包含層	壺A	須恵器	青灰色					良 好	クロロ調整、底部回転糸切り	完
33-4	包含層	壺	土師器	赤褐色	雲母片を含む				良 好	クロロ調整、底部回転糸切り	完
33-5	包含層	壺A	土師器	赤褐色	黑色粒子を含む				良 好	クロロ調整、底部回転糸切り	完
33-6	包含層	壺A	土師器	明褐色	黑色粒子を含む				良 好	クロロ調整、底部回転糸切り	完
33-7	包含層	壺A	土師器	明褐色	雲母片を含む				良 好	クロロ調整、底部回転糸切り	2/3
33-8	包含層	壺A	土師器	赤褐色	砂粒を含む				良 好	クロロ調整、底部回転糸切り	完
33-9	包含層	粘土器	土師器	赤褐色					良 好	手づけ	1/3

表10 塙田遺跡出土古代土器調査表(2)

第5章 自然化学分析

境田遺跡における自然化学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

長野県小県郡真田町に所在する境田遺跡では、古墳時代・平安時代に属する遺構が検出され、伴出遺物も豊富である。

境田遺跡は、古墳時代後期及び平安時代の集落跡である。古墳時代の住居址から大型の石組みの煙道が検出され、注目された。また、石製模造品も出土しており、集落の性格を考える上で興味深い。

本分析調査では、以下のような調査課題が要望されたので、それに沿って分析手法を選択し、各課題毎に報告する。なお、動物遺体鑑定については、鑑定と解析は早稲田大学 金子浩昌氏に依頼して行なった。

1 調査課題

調査区から検出された遺構・遺物を対象として、次の調査課題を設定した。

(1) 土器の内容物推定

古墳時代後期(鬼高式)、あるいは平安時代の住居址では、内部に土が充填された土器が出土している。そこで、これらの土器の内容物に関して、植物珪酸体分析により情報を得る。

(2) カマドの燃料材推定

上述の住居址からは、カマドも検出しており、当時の燃料材の痕跡が残留することが期待された。そこで、植物珪酸体分析により燃料材の種類について情報を得る。

(3) 動物遺存体の鑑定

古墳時代の可能性が指摘されている土坑から出土した動物の歯の種類を鑑定する。

2 試 料

土器の内容物推定および燃料材推定の分析

試料を、表11に示す。

土器の内容物推定に用いる試料は、古墳時代後期(鬼高式)の6号住居址より直立した状態で出土した坪、4号住居址の床面より散在して検出された坪や壺、甕などの土器、平安時代とされる3号住居址のカマド付近から出土した甕である。

燃料材推定に用いる試料は、古墳時代後期(鬼高式)とされる5号・6号住居址、およ

調査項目	順位	地点・遺構名	時 代	試料名	備 注
内容物の推定	2	3号住居址	平安時代	No.1	長胴カヌ(倒置)
	3	4号住居址	古墳時代 後期	No.8 No.10 No.11 No.12 No.14 No.17	高环(倒置) 小切底(倒置) 甕(直立) 小型カヌ(倒置) 長胴カヌ(倒置) 長胴カヌ(倒置) はそう
	5	6号住居址	古墳後期 鬼高式	No.1	坪(直立)
燃料材の推定	1	1号住居址	平安時代	カマド1層 カマド2層 カマド3層 カマド4層 カマド5層 カマド6層 カマド7層	櫻土 耕作土の残り
	2	3号住居址	平安時代	カマド3層 カマド4層 カマド5層 カマド6層	
	4	5号住居址	古墳後期 鬼高式	カマド4層	
	5	6号住居址	古墳後期 鬼高式	カマド4層 カマド5層	施工用
					合 計 24点

試料の表記および添付資料をもとに作成した
表11 境田遺跡の分析試料一覧

び平安時代とされる1号・3号住居址のカマド覆土である。

動物遺存体の鑑定は1号坑3の石製模造品と同レベルで出土した動物の歯と思われる遺物を対象とした。

3 分析方法

湿重5g前後の試料について、過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理、沈定法、重液分離法の順に物理・科学処理を行い、植物珪酸体を分離濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥する。乾燥後、ブリュウラックスで封入しプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査して、試料中の組織片の有無を調べる。組織片が認められれば、組織片中のイネ科葉部短細胞珪酸体および機動細胞珪酸体の分類（近藤・佐瀬、1986）を参考にして同定する。結果は、組織片の種類とその検出個数の一覧表で示す。

4 土器内容物の推定

(1) 組織片の産状

結果を表12に示す。

組織片は、4号住居址のNo.8を除いて認められ、そのほとんどが不明組織片である。その他には、3号住居址のNo.1、4号住居址のNo.11・14・17、6号住居址のNo.1でイネ属珪酸体や短細胞列、機動細胞列がわずかに認められる。

(2) 考察

イネ属の組織片が検出された土器のうち、3号住居址のNo.1や4号住居址のNo.14・17は土器が倒置して漬された状態、4号住居址のNo.11や6号住居址のNo.1は直立てて口を上に向けた状態で出土している。そのため、上位の土壤が土器内に混入した可能性も否定できない。

ただし、同じ倒置して漬れた土器や直立てて出土した土器でイネ属が検出されなかったものも認められた。この点を考慮すれば、イネ属が土器内に存在していた可能性も考えられる。

古墳時代後期（鬼高式）や平安時代の土器内からイネ属が検出された点は、同じく真田町に存在する四日市遺跡と同様であった（真田町教育委員会1996）。今後、当該期の住居内で貯蔵した栽培植物などについては今回のような土器内充填土の分析調査と並行して、種子の洗い出しなどにより情報を得ていく必要がある。

5 燃料材の推定

(1) 組織片の産状

結果を表13に示す。

組織片は、1号住居址、3号住居址、5号住居址からイネ属に由来したものや不明組織片が検出される。その検出個数は、四日市遺跡のカマドよりも多い傾向にある（表14）。また、5号住居址ではススキ属短細胞列も認められる。

6号住居址では、不明組織片がわずかに認められるに過ぎない。

(2) 考察

検出された組織片の種類から、古墳時代後期（鬼高式）や平安時代にはイネ属やススキ属が燃料材として

種類	3号住 No.1			4号住 No.11			6号住 No.1		
	試料番号	高环	No.10	No.11	No.12	No.14	No.17	~??	No.1
組織片									
イネ属珪酸体	-	-	-	3	-	2	1	-	2
イネ属機動細胞列	1	-	-	2	-	-	-	-	4
イネ属機動細胞列	1	-	-	2	-	-	-	-	4
ススキ属短細胞列	-	-	-	-	-	-	-	-	5
不明組織片	17	-	9	13	4	19	13	7	26

表12 境田遺跡の土器内部充填土より検出された組織片

試料番号	1号住 カマド							3号住 カマド				5号住 カマド			6号住 カマド	
	1層	2層	3層	4層	5層	6層	7層	3層	4層	5層	6層	4層	5層	2層	3層	
組織片																
イネ属頸桂酸体	20	25	6	21	—	—	14	4	9	1	—	4	9	—	—	—
イネ属短穀胞列	12	13	13	13	—	7	24	1	7	8	—	4	—	—	—	—
イネ属葉動植物列	7	2	3	—	—	—	5	2	8	1	—	24	—	—	—	—
ススキ高短細胞列	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	10	—	—	—	—
不明組織片	50	35	14	52	—	25	110	44	68	38	—	152	17	5	—	—

表13 境田遺跡の炉・カマドより検出された組織片

種類	1号住 カマド				4号住 カマド				6号住 カマド				15号住 炉体土器			
	覆土	4層	5層	6層	3層	7層	2層	6層	7層	覆土	燃土	口縁	周巾	底下	—	—
組織片																
イネ属頸桂酸体	—	—	3	—	1	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—
イネ属短穀胞列	2	—	—	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
不明組織片	5	—	1	2	30	5	8	1	1	13	15	7	15	4	—	—

表14 四日市遺跡の炉・カマドより検出された組織片

利用されていたと思われる。この点から、栽培されていた植物や周囲に生育する植物が燃料材として利用されていたことがうかがえる。

なお、四日市遺跡よりも検出個数が多かったのは、灰が挿き出されぬまま埋積したことと考えられる。

6 動物遺存体の種類

早稲田大学 金子浩昌

古墳時代のものである可能性のある土坑から二十数点の馬歯が検出されている。そのうち3点、上顎臼歯1点と下顎臼歯2点を実見して鑑定した。

動物種名：ウマ Equus Caballus

Na 1 左側上顎第4前臼歯。歯冠長24.3、歯冠幅25.7、歯冠高29.3

Na 2 右側下顎第2臼歯。歯冠長23.0、歯冠幅13.1、歯冠高40.8

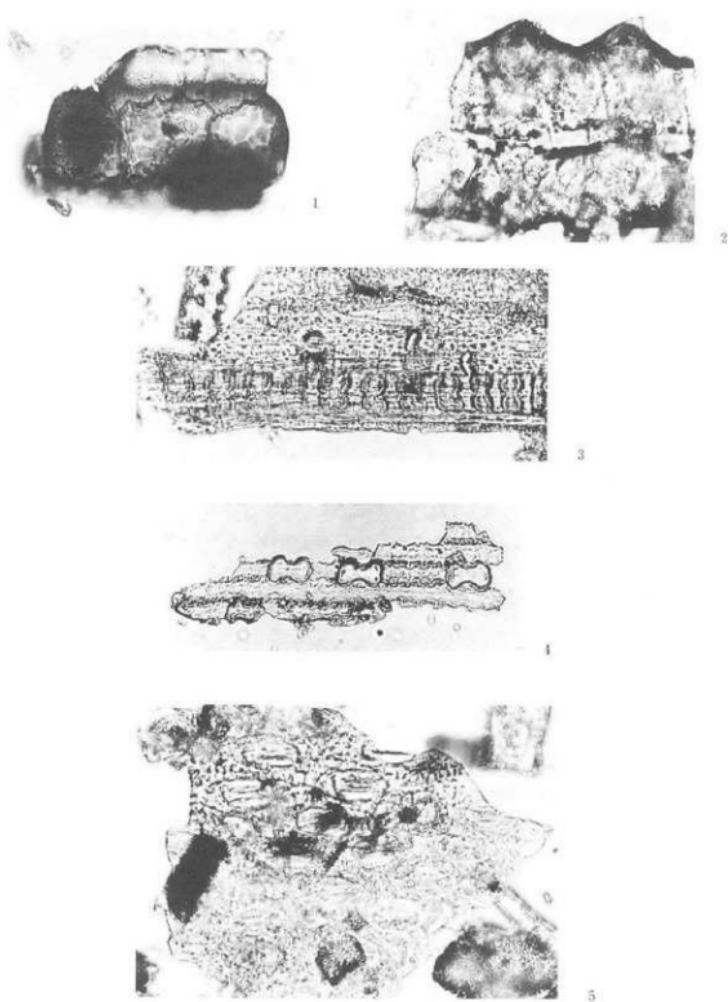
Na 3 下顎臼歯破片

これらの臼歯はかなり摩滅したもので、10才以上の年齢に達する個体であったと思われる。性別は不明。

中型でもより小さい体格のウマではなかったかと考えられる。

<引用文献>

近藤錦三・佐瀬 隆（1986）植物珪酸体分析、その特性と応用。第四紀研究、25, p.31-64



1 イネ属機動細胞列 (SB 1・竜1層)
 2 イネ属顆粒酸体 (SB 1・竜2層)
 3 イネ属單細胞列 (SB 1・竜1層)
 4 ススキ属單細胞列 (SB 5・竜4層)
 5 不明組織片 (SB 1・竜1層)

境田道路から検出された植物性酸体

第6章 西田遺跡の調査結果

第1節 発掘調査の概要

1 遺跡および調査対象地点の概観

本遺跡は本原地区の住宅地に接するクルミ畑の中にあり、江戸時代に小沼長者屋敷と呼ばれる土豪の邸宅があったと伝えられる地に隣接している。本原地区には小規模な円墳が多くみられるが、周辺は宅地化が顕著で、水田も多く、以前から古墳が破壊されていたと思われる。実際、石室の一部であったと推定される大きな半石が無造作に放置されており、私達の知る以前に消えていった古墳も少なくないであろう。

発掘調査の当初の目的は小沼長者古墳を確認することにあった。遺跡分布図に登録されていたものの、古墳の位置及び現況については何一つ不明であった。そこで、

① 古墳の名の由来となっている小沼長者屋敷に隣接していること。

② 古墳の一部ではないかと推定される巨石の存在。

等から調査地点を1ヶ所に特定し、調査に臨んだ。結果的には古墳は確認できなかったが、新たに別の遺構を検出した。この遺構については遺跡地の地名を取り新たに西田遺跡とし、文化財保護法に基づきこの遺構を新発見の遺跡として文化庁に届け出た。

調査対象地点は南西に向かって傾斜しており、面積は約150m²を計る。畠地として利用されており、一部切土・盛土が認められる。

2 調査の方法

昭和52年度作成のマイラーベースによれば、古墳の位置は今回の発掘調査地点付近にあり、古墳そのものについては「埋滅」とあった。しかし何らかの痕跡が残っていることも考えられたので、周囲の踏査を行い、遺構の可能性のある場所を特定することから始めた。その結果、小沼長者屋敷があったと伝えられる場所の南西に直径2.5m程の巨石の存在を確認した。これ以外に有力な地点を発見できなかったため、この巨石周辺にトレンチを設定し、周溝などが残っていないか調査することとした。調査の結果、人為的に削られた石の集積と若干の土師質土器片及び陶器片が検出された。当初は積み石塚の可能性も捨てられないとして調査を行なったが、トレンチ調査のみでの判断は危険を伴うので、遺構の確認のみにとどめ、翌年の本調査に備えた。

本調査では前年確認された集石の範囲を表土を重機で剥ぎ、以下は人力で集石を露出させた。

遺構の実測方法は簡易通り方で行なった。

3 遺構・遺物の概観

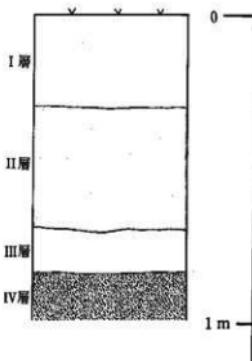
遺跡は出土した遺物から中・近世のものと推定される。掘り込みの確認は出来なかつたが、穴を掘って石を投げ入れたという様子は見えなかつた。遺構は中央に大きめの石を配置し、その周囲4~5mの間に板状に削った石や径20~30cmの円礫を集積している。集石に近接して長径3m程の楕円形の巨石が在り、この遺構との関連を窺わせる。遺物は集石直上または石の下から出土しており、遺構の時期決定に使用しても差し支えないと思われる。遺物は土師質土器または陶器の破片がほとんどであるが、石臼の破片が集石中から検

出されている。

4 基本層序

もっとも多いところで4層に細分できた。I層は表土ないし耕作土、II層（褐色土）が堆積腐食土層、III層とIV層がローム層である。I～II層は20～30cmの層厚を保つ。削平・流出によりI層直下にIII層が存在する部分がある。II層中に掘り込み等を確認できなかったので、遺構の検出を行なったのはIII層上面となった。III層はソフトローム、IV層はハードロームである。

I層	10 YR 2/2	黒褐色	耕作土
II層	7. 5 YR 4/4	褐色	しまりあり・粘性あり
III層	7. 5 YR 5/8	明褐色	ソフトローム層・しまりあり・粘性ややあり
IV層	7. 5 YR 5/8	明褐色	ハードローム層・硬化している



第39図 西田遺跡基本土層図

5 検出された遺構・遺物

西田遺跡から検出された遺構・遺物は下記のとおりである。

遺構	中世?	集石遺構
遺物	土師質土器	すり鉢・小皿
	陶器	瀬戸系陶器（中世・近世）
	石製品	石臼
	土製品	土製円盤（縄文）

第2節 調査の結果

1 遺構と遺物

今回検出された遺構の性格については明らかにし得なかった。しかし、手掛かりになるものとして、集石に隣接する巨石と集石の中央部の石に、石を切り出す際に使う矢の跡が残っていた。集石のなかに礫に混じって割れた板状の石も少なからず存在しており、関連が注目される。

集石遺構の構造は、中央部に1m程度の花崗岩が十数個集中し、それを中心として半径6mのあいだに20cm程の礫や板状の石が散布している。III層を若干掘り込んで形成されたようである。石は花崗岩や玄武岩が主である。中央部の花崗岩が箱状に組まれたような形を呈していたため、当初は古墳の石室ではないかとも

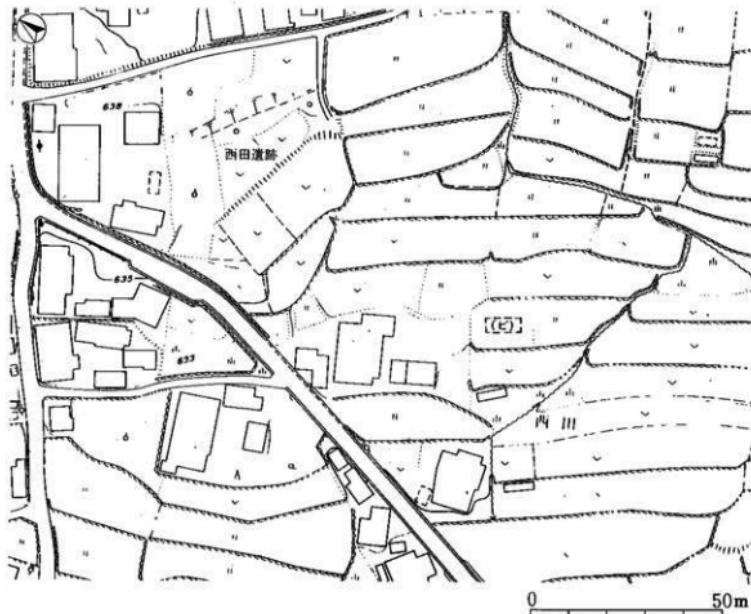
考えた。中央部を構成する石のひとつに矢を打ち込んで割った痕跡があった。遺構検出時は中央部も礫などで覆わっていた。集石の南側に近接して直径50cmほどの土坑を確認したが、遺物は検出されなかった。

発見された遺物の量は少ない。陶器・磁器・土師質土器がみられる。陶器はほとんどが中世の所産で、近世のものが2点混じる。また、集石内から石臼の破片が3点（同一個体）出土した（第42図-10）。

遺物は破片資料がほとんどで、全形の分かる資料には恵まれなかった。中世の陶器は室町時代以降のものと推定される瀬戸系陶器が出土した。第42図-1は茶碗の破片。2は把手のついた壺の類か。4～6は須恵質の壺の破片。7はかわらけの小皿のようなものか。8は土師質のすり鉢の破片である。ただし、土師質のすり鉢は江戸時代にも類例がみられるとのことであり、本例も時期が下がる可能性がある。その他、岡化できない資料も多かったが、出土した遺物のほとんどは中世の遺物であった。遺構の所属時期を考えるうえで示唆的である。

近世の遺物のうち岡化できたものは1点である。第42図-3は瀬戸系陶器の茶碗の底部である。藍の染め付けが表面にみられる。もう1片岡化できない小破片が出土している。両者とも全体の遺物の量からすれば微量で、また覆土中からの出土でもあり、後世の混入と思われる。

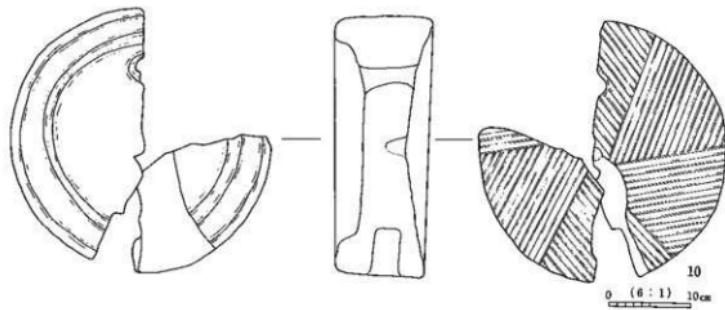
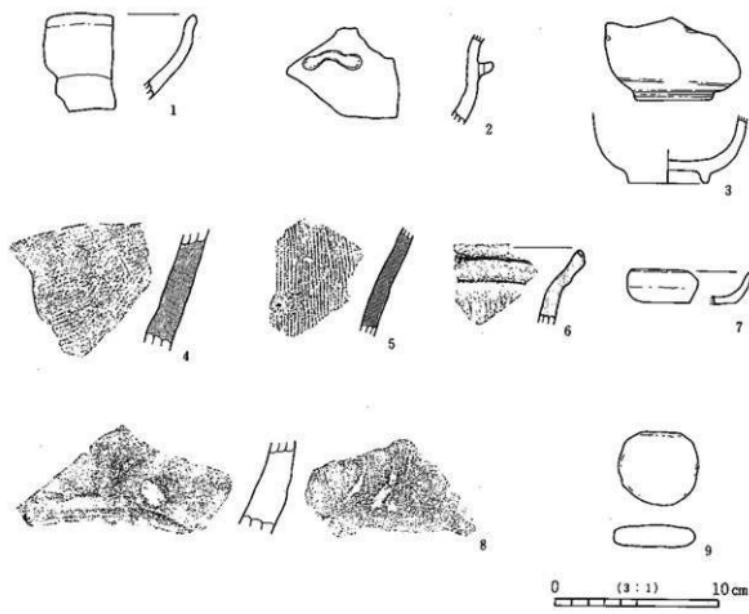
第42図-9は土製円盤である。縄文土器の口縁部破片を再加工して作られている。無文であり、土器型式等については不明である。



第40図 西田遺跡の位置と発掘区



第41図 西田造路遺構全体図 (1/60)



第42図 西田遺跡出土遺物実測図

第7章 調査の成果と課題

第1節 境田遺跡

1 旧石器時代

(1) 槍先型尖頭器について

ローム層上面から単体出土した。付近から旧石器時代の遺物及び遺構は確認されなかった。境田遺跡周辺を含めて、いわゆる本原扇状地面での旧石器時代の遺跡及び遺物の出土は知られていない。これが旧石器時代の遺物とすれば今回の出土が初見である。

旧石器時代の槍先型尖頭器とした根拠については先述したが、旧石器的な製作技法、それにローム層上面からの出土である点を挙げた。幅広で木葉型の形態は、長野県和田村の男女倉遺跡の出土例に類似する。

しかし、旧石器時代の槍先型尖頭器としてよいものか、幾ばくかの不安が残る。別の見方をすれば縄文時代の搔器として考えることも不可能ではない。単体での出土である点や主刺離面の剥離痕が比較的新しい感じを受けるためである。否定的な見方をすればきりがないが、別の可能性をも含んでいるということも書き添えておく。大方のご教示を講う次第である。

2 縄文時代

(1) 晩期の水式土器について

今回の調査では包含層からではあるものの、縄文時代の土器や石器の出土がみられた。前期から晩期まで幅広い時期の遺物が出土しており、周辺で縄文時代全般にわたって人々が生活していたことが窺え、特に晩期の遺物が出土したことが注目される。今回の調査では水式土器の大破片と他に数個の土器片、石器が出土した。町内で晩期の遺跡というと境田から北に1～2km離れた雁石遺跡（後期～晩期佐野式が主体）などが知られるのみで、今回の資料は貴重である。また、境田から南西に1km程離れた上田市の大日ノ木遺跡が発掘調査され、まとまった晩期の資料が出土したようである（長野県埋文センター1994）。神川流域の縄文時代晩期の資料が増えつつあり、今後の調査例に期待される。

今回境田遺跡から出土した水式土器は口縁部付近の文様構成や器形の詳細が分かる良好な資料である。口縁部～頸部に無文帯を有し、胴部以下は細密条痕が施される。現存部の細密条痕は時計回りの横位のものであるが、胴下半部の実際は不明である。また、口外帯の系譜で考えられる突起が口唇部にあり、その点で水式のなかでも後出的な印象を受ける。当地域の初期弥生文化の波及を考えていく上で、ひとつの手掛かりを与えてくれそうな資料である。

3 古墳時代

(1) 古墳時代後期の遺物について

古墳時代の住居址からまとまった資料が出土した。今まで後期の古墳の存在は知られていたものの、集落や土器群の様相については不明なことが多かった。今回出土した資料は、その点をカバーするものとして注目される。

4号住居址では計12個体の土器がみられ、実にバラエティに富んだ器種が出土した。すべて土師器であり、

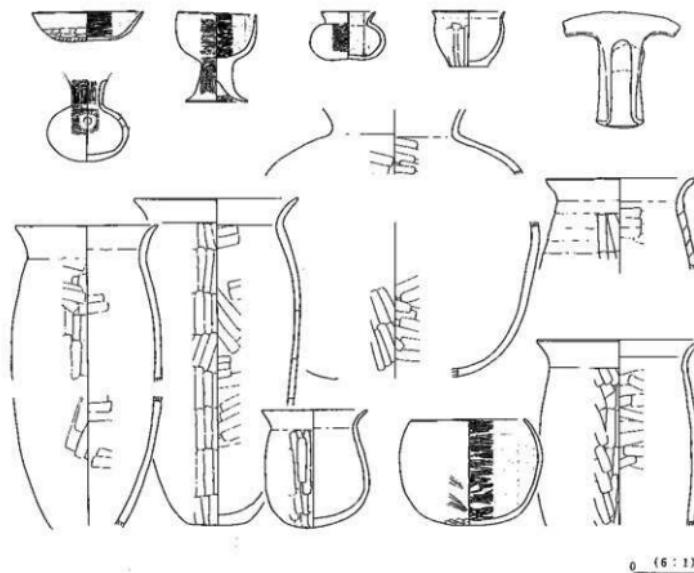
埴や甕F（長野県埋文センターほか1990）といった須恵器を模倣したようなものもある。当時の土器の器種構成を窺わせる良好な資料である。また、遺構の切り合いといった面からみると、5号住居址と6号住居址は重複関係にある。遺物の量が少なかったのが残念であるが、後期土器群を更に細分する場合に貴重な資料となろう。ここ数年当町では古墳時代後期住居址の検出が相次ぎ、それに伴い資料が増加しつつある。これらの土器群を如何に整理し、順序立てていくかがこれからの課題であろう。

また、石製模造品の出土も大きな成果である。包含層出土の劍型と思われる1点を除いて全て白玉である。境田遺跡の白玉は全て滑石製で、一般的な白玉と比べると大きく、作りもやや粗雑である。調査時には玉作り工房址の検出を意識して行なったが、検出には至らなかった。同時期と思われる四日市遺跡の集落では10軒以上の住居址を検出したにも係わらず石製模造品の出土がないことから、境田遺跡での出土は玉作り工房址の存在とも絡めて注目される。

手斧の出土も成果のひとつである。特異な形態を呈しており注目される。

(2) 古墳時代の住居址の煙道について

古墳時代の住居址から石組みの煙道が検出された。今回の調査で最も注目されたものである。同様の煙道は佐久地域ではみられることがあるが、上小地域では類例を知らない。住居址の時期は出土土器から後



第43図 境田遺跡 4号住居址出土遺物

期鬼高式期のものと思われる。煙道は2軒の重複した住居址から検出されている。竈の煙道というと単に地面を溝状に掘り窪めた形で検出されるのが一般的であるが、こうした形態の煙道を作った原因は何であろうか。境田遺跡の存在する地域のローム層は乾燥すると砂状になり、壁面などはボロボロと崩れてしまうような特徴があり、煙道の崩壊防止のために石で補強したとも考えられる。また、調査区が狭く、住居址の検出数も少ないので何とも言えないが、石組み煙道を持つ住居と持たない住居があるようだ。先述した四日市遺跡では同様の煙道をもつ住居址と持たない住居址がみられる。そして石組み煙道を持つ住居址は集落のなかでも1~2軒である。このような現象は何を表しているのだろうか。この煙道については製作目的或いはその意義等についてこれからの検討課題となろう。

いずれにしても、境田と四日市では作り方を同じくする煙道がみられるということに注目したい。境田と四日市は直線距離にして約2kmの距離である。後期のある時期には本原扇状地に集落を構えた複数の集団は共通した竈の煙道の作り方の風習をもっていたようだ。

4 平安時代

住居址を2軒検出した。調査区の南部分でかなりの土砂流失が認められるので、本来の数ではないと考える。遺物については住居址内から若干の出土があったが、特記できるものはなかった。造構外から灰陶器のほか完形の塊と、固化はできなかったが綠釉陶器の小破片が出土した。

当地域では該期の集落は他に藤沢遺跡と四日市遺跡が発掘調査され、特に四日市では多くの住居址や掘立柱建物址、小鐵冶造構が検出された。今回の調査で本原扇状地面の全域にわたって集落が点在していたらしいことが判明した。今後はそれらがお互いにどのようにつながっていたかを検討していかなければと思う。

5 中世以降

今回出土した銅錢は出土状態等から備蓄銭などの可能性が考えられる。この地域周辺では以前からこのような銅錢の出土が知られ、今回も調査区での4枚の出土以外は一ヶ所からのまとまった出土である。造成の最中の偶然の出土であったため、造構等の確認には至らなかった。今後も検出される可能性があり、注意しておきたい。

また、発掘区に隣接して出早雄神社と呼ばれる山岳信仰に関連した神社があり、それとの関わりもあるのかもしれない。いずれにしても当地域の真田氏以前の様相については不明な点が多く、これから検討課題である。

第2節 西田遺跡

今回の調査は小沼長者古墳の確認調査に端を発した。当町の埋蔵文化財台帳によれば小沼長者古墳は埋滅とあり、今回は古墳の痕跡だけでも発見できればと調査を実施した。結果的に古墳と推定されるような造構は確認できず、全く別の性格を有する集石造構を検出することとなったが、この造構についてはまだまだ不明な点が多い。しかし、出土遺物から造構のおおよその時代、時期が決定できそうである。また、石を切り出した痕跡が残っており、その方面からの検討も必要であろう。土地の古老のお話によれば、石を切り出したのは明治時代以前らしいとのことであり、明治時代に作成された旧公園にも今回注目した巨石についての記載はみられない。

遺構の検出状況から推定するに、おそらく石を加工する何らかの行為が行なわれたと考えてよきそうである。しかし、具体的なことについては何一つ分かっていない。古文書等の文献資料を援用していくことも必要であろう。

ここで、近世の小沼長者屋敷についてふれておこう。小沼長者とは江戸時代に下原村の庄屋を勤めた人で、名を小沼求女（元日）という。伝承によれば、今回の調査地点付近に屋敷があったとされている。小沼夫妻の墓は屋敷跡に近い自性院という寺にあり、それによると小沼求女氏が他界したのは寛文一年（1661年）寅二月三日のことである。この屋敷跡については遺構等は確認されてはいない。小沼長者古墳の名の由来がここにあり、当町の古墳のほとんどが字名を名に冠していることを考えると、小沼長者古墳がある設定された区域にあった古墳だということが理解できる。古墳の在った位置を確認できなかったのは残念であるが、この遺構の発見によって、今まであまり注目されることの無かった小沼求女氏についてあらためて考えるよい機会となった。

〈引用・参考文献〉

- 真田町教育委員会 1990 『四日市遺跡』
長野県史刊行会 1989 『長野県史 考古資料編』1-4
長野県埋蔵文化財センターほか 1990 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4
—松本市内その1— 総論編』
1994 『長野県埋蔵文化財センター 年報』
益富壽之助 1995 『原色岩石図鑑』

おわりに

境田遺跡の調査は失敗の連続であった。まず、石組みの焼道を祭祀関連の遺構として認識してしまったこと。短い調査期間のなかで無益に過ぎていった時間が多かった。

「とにかく場数を踏むことだ。」現場を訪ねてくださった先輩の言葉である。新卒で赴任していきなり任せられた現場。しかも調査期間は否応なしに過ぎていく。ひとつの現場が終わり、整理作業のなかで生まれてくる反省点をひとつも見つけることができないままいくつかの現場を「処理」してしまった。いまここでいくら後悔してもあの時あの瞬間は戻ってこないのである。「発掘調査と遺跡破壊は紙一重である。」あらためてその言葉の意味を認識した次第である。

発掘調査ではたくさんの方々にご指導、ご協力いただいた。改めて御礼申し上げたい。

(担当者)

写 真 図 版

境田遺跡(I)



4号住居址出土状況（南から）



4号住居址高环出土状況



4号住居址甕出土状況



4号住居址甕出土状況

写真図版 2

境田遺跡(2)



6号住居址全景（南西から）



6号住居址竪および煙道完堀



6号住居址环出土状況



豊穴状遺構 1号出土状況

境田遺跡(3)



1号居住址全景（南から）



1号居住址竪穴完掘



7号居住址全景（南西から）



耕作土直下「皇宋通宝」出土状況



作業風景

写真図版 4

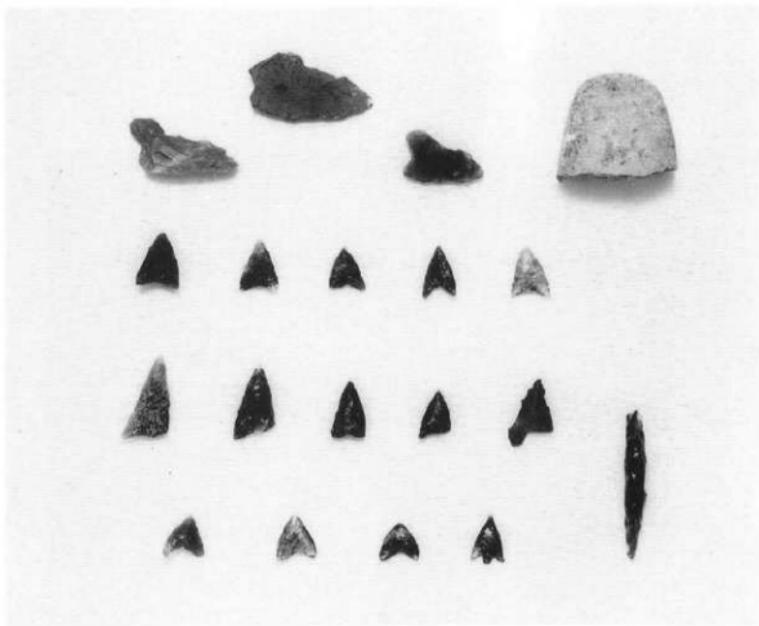
境田遺跡(4)



槍先型尖頭器と思われる石器



縄文時代の用途不明土製品

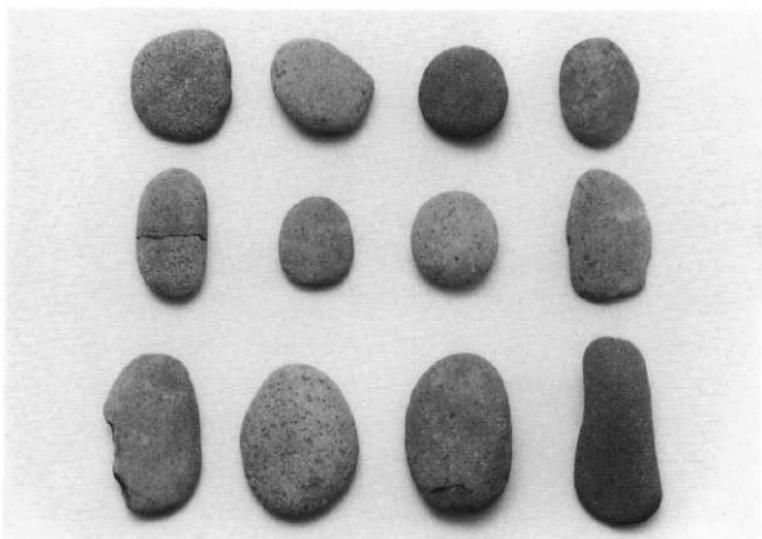


縄文時代の包含層出土の石鏃ほか

境田遺跡(5)



縄文時代の包含層出土の打製石斧



縄文時代の包含層出土の磨石類

写真図版 6

境田遺跡(6)



4号住居址出土の古墳時代土師器



5号住居址出土の古墳時代土師器

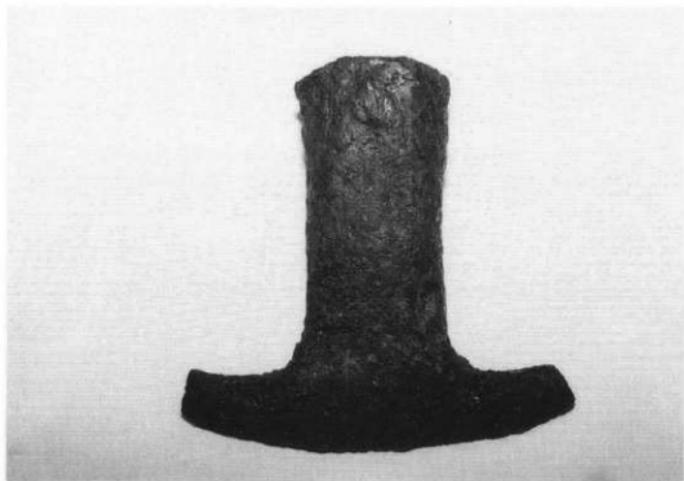
境田遺跡(7)



5 号住居址出土の古墳時代土師器



石製模造品

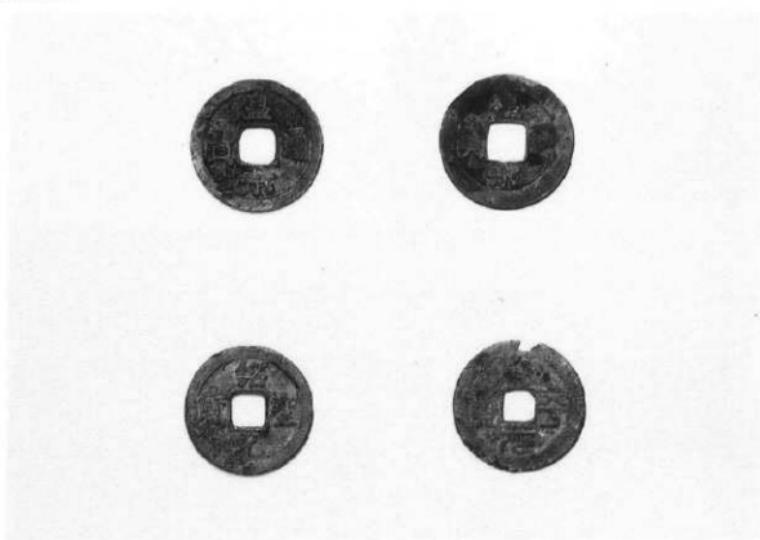


4号住居址出土手斧



4号住居址出土手斧X線写真

境田遺跡(9)



中世渡来銭



発掘調査参加者



巨 石



集石断面



集石中央部



十 九 鍤 破 片 出 土 状 況

報告書抄録

ふりがな	さかいだいせき・にしだいせき						
書名	境田遺跡・西田遺跡						
副書名	本原地区農村活性化住環境整備事業に伴う緊急発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	真田町埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ番号	第8集						
著者名	和根崎剛・川上麻子						
編集機関	真田町教育委員会						
所在地	〒386-22 長野県小県郡真田町大字長7199-1 ☎ (0268) 72-2655						
発行年月日	1996年3月22日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	南緯 〃	調査期間	調査面積	調査原因
さかいだいせき 境田遺跡	ながのけんおおやまぐん 長野県小県郡 まるたまちおおやま 境田町大字 もとはなみざきひらた 本原字境田		115		1993年 11月22日～ 11月26日 1994年 6月14日～ 8月19日	2,500m ²	は場整備事業 に伴う事前調 査
こしだいせき 西田遺跡	ながのけんおおやまぐん 長野県小県郡 まるたまちおおやま 西田町大字 もとはなみざきひらた 本原字西田		127		1993年 11月15日～ 11月18日 1994年 6月14日～ 8月12日	150m ²	同上
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
境田遺跡	集落址	縄文 古墳 後期 平安	竪穴住居址 土坑址 小鐵冶遺構	7軒 9基 1基	槍先型尖頭器 繩文土器 前期～晚期 打製石斧・石鎌・石匙 土師器・須恵器 灰陶陶器 鉄製品(手斧・鉄鎌) 石製模造品(白玉)	古墳時代の住居址から 石組みの煙道が検出さ れた。周辺地城では稀 なものである。また、 石製模造品が出土した。	
西田遺跡	集石址	中世～ 近世	集石遺構	1基	土師質土器 中近世瀬戸系陶器 石臼 土製円盤	中世のものと思われる の集石遺構を検出した。	

真田町埋蔵文化財発掘調査報告書

- | | | | |
|------|-----|----------------------|--|
| 1973 | 第1集 | 『日向畠遺跡』 | 中世の墳墓群の調査。五輪塔などが出土。 |
| 1975 | 第2集 | 『麻石・藤沢』(品切) | 縄文後晩期の配石遺構、石棺墓、亀形土製品などが出土。 |
| 1977 | 第3集 | 『山本畠遺跡緊急発掘調査報告書』(品切) | 平安時代の住居址、須恵器の耳皿、刻畫土器。 |
| 1982 | 第4集 | 『真田氏城跡群』 | 本城、横尾城跡など概要調査報告書。 |
| 1990 | 第5集 | 『四日市遺跡』 | 縄文中期後葉・平安時代の集落址の調査。加曾利E式土器、唐草文系土器が主体。 |
| 1992 | 第6集 | 『真田氏館跡』 | 真田氏館跡の調査。原跡、土塁等を確認。 |
| 1996 | 第7集 | 『四日市遺跡II』 | 縄文前期・中期後葉・古墳時代・平安時代の集落址の調査。関山式土器、加曾利E式土器、唐草文系土器、块状耳飾りなど。古墳時代後期の一括資料。 |
| 1996 | 第8集 | 『境田遺跡・西田遺跡』 | |

境田遺跡・西田遺跡

— 本原地区基幹農村活性化住環境整備事業に伴う緊急発掘調査報告書 —

1996年3月22日 発行

編集 真田町教育委員会

発行 上小地方事務所
真田町教育委員会

印刷 ほおづき書籍株式会社
